

<3歳クラス I期 4・5月> 安心感を支えるための援助

これまでの保育の様子

初めての集団生活となる幼児も多く、初めての環境に戸惑いもありながら、園での生活がスタートしたI期は、「教師とかかわりながら自分の安定できる場を見付けていく時期」である。これまで生活してきた環境や、育ちの様相はそれぞれ異なっているため、教師との信頼関係をつくり、園での生活の仕方や流れに、徐々に慣れていくことを大切にしていこうと副担任と話し合った。入園してから、登園して担任と挨拶を済ませると、多くの幼児が「バイバイ」と言って保護者と離れ、スタートはおおむねスムーズであった。年上の幼児の遊んでいる様子を見て、保育室前の砂場から少しずつ遊びの行動範囲を広げ、池の生き物や園舎裏での探検にも興味をもつようになり、生き生きとした表情で遊ぶ姿が見られた。

4月中旬、A児はさまざまな遊びに興味をもち、砂場を掘ったり、子どもの家でフライパンや玉じゃくしを使って料理をしたり、固定遊具に挑戦したりした。ポットを使って友達のコップに水を注いだり、友達から摘んだ花の場所を教えてもらったりするなど、同じ3歳クラスの幼児とかかわって遊ぶ姿も見られた。しかし、4月下旬頃から、朝の挨拶をする頃に顔の表情が曇るようになり、目にいっぱい涙をためる姿が見られるようになった。朝の挨拶を終えてもすぐに保育室に入らず、担任の横で登園する幼児たちの受け入れの様子を見ていることが多くなり、友達が保育室に入る時、一緒に支度をしようと促しても「できない、やって」と自信なく答える姿が見られた。担任は、隣にいるA児が幼稚園で楽しい雰囲気でも過ごせるように、同じクラスの友達が登園したことを知らせたり、「今日は何する?」「一緒にやろう」と、明るく声を掛けたりした。

入園当初は、新たな環境に気持ちが高まり、さまざまな遊びを楽しんでいたように見えたが、これまで家庭で一緒に過ごしていた保護者と離れる時間が長くなったことで不安な気持ちが増し、環境の変化に戸惑っているのではないかと捉えた。不安な気持ちになることは当然のことであり、ゆっくり慣れていけばよいだろうと思いつつも、担任はなんとかA児の楽しみを見付けたいと考えていた。4月下旬、教育補佐員Yが3歳クラスの援助に入ったことをきっかけに、朝の受け入れが終わるとすぐに「Y先生は? Y先生と一緒に遊ぶ」とA児は教育補佐員と一緒に過ごすことを求めるようになった。A児は教育補佐員と手をつないで園庭を歩きながら、他の幼児が遊んでいる姿を眺めて過ごしており、教育補佐員が他の幼児の援助に入ろうとすると、A児は強く手を引っ張り、教育補佐員と二人で遊ぶことを好んだ。「自分」を見てもらいたいという気持ちがあるように感じられた。入園してまだ数週間しか過ぎていないため、焦らずにこの様子を見守ることが大切なのかもしれないのだが、このままでよいのだろうかと思いつつも担任は悩んでいた。もしかしたら、A児の思いを大切にしながら、今できることが何かあるのではないかと、いつ、どんな援助をすればA児の育ちにつながるのだろうか、これからの方向性を模索していた。

5月1日 あそびの時間

担任:「Aちゃん、お兄さんたちが何かしてるね。なんだろう」
A児:「うーん」
担任:「a君、これなにしてるの?」
4歳クラスa児:「オタマジャクシ捕ってるんだよ」
担任:「a君、捕れたの?」
4歳クラスa児:「うん、捕れたよ」
担任:「へえ、どうやって捕るの?」
4歳クラスa児:「これで、こうやったら捕れるんだよ」すくうまねをする。
担任:「そうなんだ。Aちゃん、ここにオタマジャクシがいるんだって。どこだろう」
4歳クラスa児:「ここにいるよ。これ、捕ったの」
担任:「見せてくれるの?」
4歳クラスa児:「うん、いいよ」
担任:「Aちゃん、お兄さんがオタマジャクシ見せてくれるって」
A児:「私は見なくていい」
4歳クラスa児:「池のここにもいるよ」
担任:「どこどこ? Aちゃん、見える?」
A児:「私は見ない」
担任:「Aちゃん、ここにいるみたいだよ」

A児：「私は見なくていいの！」

A児は担任と手をつないで園庭を歩き始め、3歳クラスの幼児が遊んでいるジャングルジムへ向かう。

B児：「せんせーい！見て！」

担任：「Bちゃん、そんなに高いところまで登ったの？」

B児：「そうだよー、すごい？」

担任：「すごいねえ、怖くない？」

B児：「大丈夫」

C児：「僕も登ったよー」

担任：「C君も！高い所まで一人で登ったの？」

C児：「うん」

担任：「Aちゃんもやってみる？」

A児：「私はやらない。やらなくていいから」

担任：「うん、分かったよ」

この日、A児は不安そうな表情で、担任と手をつないで池の周りを歩いていた。そこでは、4歳クラス児が何人も集まり、楽しそうに生き物捕まえをしていた。これまでにA児は他の幼児の遊びを見て、手に持った片手鍋を池の中にジャブジャブと入れていたことがあったが、動きの速い生き物を捕ることはできなかった。もしかしたらオタマジャクシやメダカの存在に気付いていなかったのかもしれない。ここで生き物に興味をもてば、A児の楽しみの一つになるのではないかと考えた担任は、近くにいた4歳クラスa児に声を掛けた。a児は担任との会話の中で、オタマジャクシの捕り方を示し、自分の捕ったオタマジャクシを見せると話したのだが、A児はそれを見ようともせず「私は見ない」と担任に言った。池で片手鍋を動かしていた時のA児なら、生き物の存在に興味をもったのかもしれない。しかし、この時は見ることにしようとしていなかった。そのような気持ちになれないほど、不安を感じていたのかもしれないと捉えた。そこで、担任は池から離れようとするA児と一緒に、手をつないで園庭を歩き、ジャングルジムに向かった。他の幼児が遊ぶ様子を見て、ジャングルジムの一部を握りしめていたA児の隣に寄り添いながら、担任はA児の「やりたい」という気持ちを引き出すにはどうしたらよいのだろうか、と迷っていた。そのような中、A児はこれまで以上に教育補佐員と一緒に過ごすことを求めるようになった。

5月半ばのオープンカンファレンスで、このようなA児の今の様子や担任の悩みについて語る機会があった。その中で「“この人と一緒にいたい”という思いがあれば、その子の願いを叶えることが大切」だという話があった。A児にとって初めての集団生活であり、これまでいつも保護者と共に過ごしていた生活から、場所が変わり、一緒に過ごす人も変わった。きっとさまざまな不安がある中で、自分が安心感のある環境を見付けようとしている。「砂遊びを楽しんでいる」「池で生き物を捕まえている」「ままごとで料理をたくさんつくっている」という姿を見れば「この子は安心して遊んでいる」と感じられるため、担任は「Aちゃんも一緒にやってみる？」「これおもしろそうだよ」などと、声を掛けてきたのだが、それは今A児が求めているものではなかったのかもしれない。A児は、教育補佐員がいつでも隣にいて、一緒に過ごし、自分を見て受け止めてもらえているということに、安心感を抱いている。ものや場所ではなく、人とつながることによって満たされる気持ちが、今のA児には必要なのかもしれない。

そこで、担任、副担任、教育補佐員とでこれからの方向性を確認した。A児が教育補佐員と一緒にいたいと思った時は、できるだけその願いを叶えられるように援助に入ってもらい、A児についての話題をこまめに共有するようにした。また、保育室の近くを離れる時、ビニル袋などの用具を使う時などは、A児が担任に確認をするように、教育補佐員に促してもらった。降園後の振り返りの時間だけでなく、保育中にも担任、副担任、教育補佐員で、「園舎裏へ行きますね」「Aちゃん、行ってらっしゃい」、「トイレ、上手にできました」「Aちゃん、すっきりしたね」など、その都度A児の様子や遊びについて声をかけ合った。担任や副担任は、A児ができるようになったことを称賛したり、したことに共感したりして、A児とコミュニケーションをとるように心がけた。

5月19日 片付けの時間

C児：「これも洗おう」

D児：「今日、洗うのいっぱいあるねえ」

担任：「本当だね、たくさんあるね。全部できるかなあ」

C児：「できるよー！」

担任：「みんなたくさん遊んだね」

D児：「でもがんばればできるよー」

E児：「こんなに洗ったよ」

担任：「本当だ、バケツいっぱいだね。Aちゃん、この片付け、お願いできる？」

A児：「うん、いいよ」
担任：「どこか分かる？」
A児：「どこ？」
担任：「ほら、あっちに黄色いかごがあるよ」
A児：「どっち？」
副担任：「こっちみたいです。入れてくれるのですか？ありがとうございます」
A児：「うん。これどっちかなあ？」
副担任：「こっちがごはんの物かな？Aちゃんのおかげで明日も遊べますね」
A児：「これはこっちかな？」
副担任：「たくさん片付けてくれてありがとう」
A児：「先生、できたよ」
担任：「Aちゃん、もう片付けてくれたの？ありがとうございます」
A児：「うん」
担任：「じゃあ、ここにお鍋があるんだけど、お願いできる？」
A児：「うん、いいよ」
担任：「私もこれ、一緒に運ぶね」
A児：「こっちかな？」
担任：「うん、Aちゃんよく知ってるね。ありがとう」

この日は、他のクラスが健康診断中だったため、3歳クラスのみで外遊びで使った用具の片付けを行った。この日は洗う物が多く、全員が用具を運び、コンテナの中で洗っていた。A児は、友達二人と一緒に机の上の砂を落とすような仕草をしていた。その後しばらく他の友達が洗っている様子を見ていたが、洗い終わったものが増えてきたので、担任はA児に声を掛け、バケツの中にある用具を元に戻すように頼んでみることにした。これまでのA児の様子から「分からない」「できない」と言うのではないかと、担任は想像していたのだが「いいよ」と言って、バケツいっぱい道具を持った。片付ける場所が分からなかったようだが、副担任が声を掛け、3歳クラスの保育室の前のかごに、仕分けをしながら片付けた。驚いたのは、一人で運んだことである。園庭では、教育補佐員と一緒に手をつないで過ごすことが多かったが、少し離れたかごまで運び、全て片付け終わると、子どもの家へ鍋や食器類を片付けに行き、さらにそこにあったスコップを持って片付けに行くなど、自分の意思で行動しており、自信にあふれていた。

午前中の遊びの時間、教育補佐員と一緒に過ごすことで、十分に気持ちが満たされ、3歳クラス児だけという少人数で、互いのことを知っている仲間同士であることに安心感を抱いたからだろうと捉えた。次の日からは、砂場の砂を3歳クラス児と一緒に掘ったり、スプーンを探している友達のためにかごの中を探しに行ったりと、友達と一緒に遊ぶ時間も少しずつ増えてきた。何より「自分でやろう、自分がやろう」という姿が多く見られるようになり、A児が自信をもっている様子が感じられた。同じクラスの仲間の存在にも、少しずつ安心感を見出しているのではないかと捉えた。

これまでとは異なるA児の姿をうれしく感じながらも、担任と副担任、教育補佐員とでA児についての情報共有は、引き続き行った。教育補佐員が隣にいらなくても遊んだり、行動したりする時間は増えてきたが、無理に教育補佐員と離れて遊ぶことを促すのではなく、A児が一緒にいたいと思った時は、教育補佐員と一緒に過ごせるようにすることを共有した。

5月23日 遊びの時間

5歳児がテラスでショーごっこをしている。
A児：「なにしてるの？」
担任：「Aさん、おかえり。お姉さんたちが、ショーやってるよ」
教育補佐員：「へえ、楽しそう。Aさんも見る？」
長靴を脱いで、ステージに上がるA児
担任：「そうか、Aさんも踊りたいんだね」
A児：「Y先生も一緒にやろうよー」
教育補佐員：「じゃあ、私もそこに行くわね」
A児：「やったあ」
ステージに上がって体を揺らすA児。そこへ5歳クラス児が来て、手をつないで一緒に踊る。
担任：「Aさん、お姉さんたちと一緒にうれしいね。ダンス素敵！」
A児：「うん」（にこにこしながら踊る）

5歳クラスa児：「じゃあさ、そら組さんいっぱい来たから、そら組さんだけで踊っていいよ」

担任：「わあ、楽しみ！」

A児：「やった！」

（3歳クラス児と一緒にステージで踊る）

担任：「みんなよかったね。素敵だったよ」

5歳クラス児のリードで、しばらく音楽に合わせて踊っている。

担任：「Aさんのダンス、とってもよかったよ。どうだった？」

A児：「楽しかったー！」

この日は5歳クラスのテラス前でショーごっこが行われており、数名の3歳クラス児が招待されて、テラス前のいすに座って鑑賞していた。そこへ、園舎裏へ行っていたA児が教育補佐員と一緒に通りかかった。ショーごっこは楽しそうな音楽が流れ、ステージで踊ったり歌ったりしている5歳クラス児の姿があった。A児は教育補佐員と共にステージの方へ向かうと、ステージに上がり、音楽に合わせて体を動かした。その後、5歳クラス児のリードと一緒に踊るなど、何曲も続けて踊っていた。5歳クラス児と楽しそうに踊っているA児の姿をみて、教育補佐員は途中でステージから下りたが、A児はそのことは気に留めていない様子で、夢中になって踊っていた。

担任は、ちょうどショーごっこの近くを通りかかったA児に声を掛けてみたものの、教育補佐員と一緒に遠くから見ていただけなのかもしれないと考えていた。同じ3歳クラスの友達と一緒にステージで思い切り踊って楽しんでいたのは、それまでの時間を教育補佐員と一緒に過ごし、十分に気持ちが満たされていたからではないかと捉えた。またこの時、何人もの5歳クラス児が、ステージに上がったA児や他の幼児たちのことを温かく迎え入れ、手をつないで一緒に踊ってくれた。これまであまり接点がなかった5歳クラス児が、優しく接してくれたことも、A児にとっての安心感につながったのではないだろうか。このようにリズムに合わせてにこやかにダンスをしているA児を見るのは初めてであったため、担任はとてもうれしくなり、手拍子をしたり声を掛けたりして、他の幼児たちと一緒に楽しんだ。A児はそれまで見せたことがないくらい笑顔で踊っており、これがA児の好きな遊びの一つなのかもしれないとも感じた。A児にとって、人のかかわりにおける安心感は、教育補佐員、3歳クラスの仲間、5歳クラス児と、少しずつ広がっていると捉えた。

考察

不安そうにしているA児に対して、楽しめる遊びをなんとかして見付けた方がよいのか、このままでもよいのかと迷い、どのように安心感を支えるとよいかを模索してきた。人、もの、こと、空間など、どれも安心感を支えるためにはなくてはならない大切なものであるが、今回のA児の育ちを通して見ると「人」の存在はとても大きいと感じた。

A児が教育補佐員と一緒にいたいと思う時、できるだけその願いを叶えられるようにし、担任や副担任は連携をとりながら、A児の思いや様子を伝え合うことで、今後の援助の方向性を確認して共有してきた。初めは不安そうな顔をして、ずっと手をつないで過ごしていたが、人とのかかわりをもつことによって安心感が満たされ、他の幼児が遊んでいる姿を見ているだけではなく、A児も一緒に遊ぶようになってきた。また、同じ空間で本を読んだり給食を食べたりするなど、共に生活をするクラスの友達、年下の幼児に対して優しくショーごっこに招き入れてくれた年上の幼児など、職員以外にもかかわりをもつ人が増え、A児が安心感を抱く人の存在が増えたことも、園で安心して過ごせるようになってきたことにつながるのではないかと感じる。安心できる人とのかかわりを持ち、花摘みや固定遊具遊びなどの安心できる遊びを繰り返す中で、A児が少しずつ園生活に慣れてきているように感じた。A児は、人への安心感を抱いたことをきっかけに、ものやこと、空間の安心感へとつながっていったが、それとは異なり、もしかしたら、始めからものやこと、空間に安心感を求める幼児もいるかもしれない。そのため、それぞれの幼児の安心感を支えることができるように、一人一人の思いをじっくりと読み取ることが必要である。

他園の参加者を交えたオープンカンファレンスで、安心感について語り合ったことで、自分の中での安心感の捉えの広がりを感じることができた。まずはA児の安心感はどこにあるのか、そのためにどうすべきかを第一に考えるということ、副担任や教育補佐員と共有したことで、自分の中での迷いがすっきりとした気持ちになった。これからも目の前の幼児に向き合い、寄り添いながら、安心感を支えていきたい。

F児：「うん」
 担任：「へえ、どうやってやるんだろう。なんだか楽しそうだね」
 牛乳パックを持って園舎裏へ行く。
 F児：「ここにアリがいたよ」
 G児：「ほんとだ」
 F児：「捕れたかなあ」
 G児：「うーん、いない」
 F児：「あ、またいたよ」
 G児：「ゲットできたかも」
 F児：「えっ、ほんと？」
 担任：「アリが捕まえられたの？」
 G児：「うん、見て見て」
 担任：「本当だ、すごいね」
 F児：「私も捕まえたいな」
 G児：「ダンゴムシも捕まえたいんだよね」
 F児：「どこにいるんだろうね」

ダンゴムシに興味をもったF児は、G児と一緒に園舎裏へ出掛けようとしていた。この頃3歳クラスでは虫を捕まえた際、ケースを持っている子の所へ一緒に入れたり、個人用のプラスチックかごや空き箱でつくったオリジナル虫かごを使ったりするなど、それぞれの方法で持ち運んだり保管をしたりしていた。F児とG児は何も持たずに外へ出たが、園舎裏へ行くタイミングでテラスに置いてある牛乳パックを見付けた。それを一つずつ手に持ち、園舎裏へ行くと、その牛乳パックを地面に近付け、すくうようにしてアリを捕まえようとしていた。何度か繰り返すと、G児の持っている牛乳パックにアリが上ってきたので、見事捕まえることができた。初めに捕まえたいと願っていたダンゴムシではなかったものの、F児はアリが動く様子をじっと見ており、生き物に対してさらに興味をもったように見えた。

これまで、牛乳パックなどの廃材は、幼児の要望に合わせて担任や副担任が保育室の教材庫から出して渡していたのだが、テラスに配置しておくことで、外へ出掛ける二人の目に留まり「これを使ってみよう」と幼児が主体的に考えて遊ぶ姿につながったのではないかと捉えた。また担任は、F児とG児がアリをすくって捕まえるための道具として、牛乳パックを使っていたことに驚いた。これまでF児は生き物に直接ふれることを苦手としていたが、牛乳パックを使うことで、自分で捕まえてみよう、生き生きとした表情で何度も挑戦していた姿も印象的であった。

副担任との振り返りでは、材料を置くスペースが動線上にあったことで、目に入りやすかったことや、牛乳パックの新たな使い方をして、虫を捕まえようとしていたF児とG児の発想が話題となった。室内に置いてあった材をテラスに置くことで、屋外での遊びとつながり、幼児の興味や関心が高まった。「これは室内に置いておくもの」と決めつけず、テラス前スペースに置いておく材料を検討することを共有した。

7月10日、みんなの時間に牛乳パックを使った船づくりを行った。「この船、早く浮かべたい」という幼児の思いがあったため、次の週のプールの時間を待たず、船を浮かべて遊べるような場をつくることを副担任と共有した。翌日テラス前に水を張ったコンテナを用意し、つくった船をその近くに置いた。また、船を自分なりにアレンジする幼児、さらに新しい船をつくってみたいと思う幼児がいることを想定して、ガムテープやペンなども用意し、作業ができるような場所をつくって環境構成を行った。

7月11日 あそびの時間

H児：「昨日の船、ここで浮かべてみよう」
 I児：「いいねー、私もやる」
 H児：「浮かぶかなあ、浮かんだ！」
 I児：「ほんとうだ！私のも浮かんだ！」
 担任：「あ、昨日つくった船、浮かんだね」
 5歳クラスb児：「何してるのー？」
 I児：「船、浮かべてるの」
 5歳クラスc児：「へえ、おもしろそうー」

5歳クラスb児：「これつくったの？」

I児：「うん」

J児：「先生、昨日の船、もうちょっとつくりたい」

担任：「いいね。ここにJちゃんのあるかな？」

J児：「これ！このガムテープ使おうかな」

担任：「カラフルな船になりそうだね」

J児：「ガムテープ、くっついちゃって取れないー。もうやだ」

5歳クラスc児：「取ってあげようか？ちょっと難しそう」

J児：「うん」

5歳クラスc児：「はい、どうぞ」

J児：「わあ、すごい、ありがとう。先生、cちゃんが取ってくれたんだよ」

担任：「助かったね。素敵な船になりそうだね」

K児：「わたしもやりたいー」

担任：「どうぞ、どうぞ」

K児：「ガムテープほしいな」

5歳クラスb児：「切れる？」

K児：「できない」

5歳クラスb児：「切ってあげる？」

K児：「うん」

5歳クラスb児：「いくつほしい？こうやるんだよ」

K児：「ありがとう。もうちょっとほしいな」

5歳クラスb児：「できた？浮かべてみる？」

K児：「うん」

この日は支度を終えたH児とI児が、さっそくテラスに置いてある船を見付けた。二人がコンテナの水に船を浮かべ遊んでいたところへ、5歳クラスb児とc児が通りかかり、遊ぶ様子をしばらく眺めていた。その後、朝の支度を終えた3歳クラス児が次々とテラスへ出てきて、自分たちがつくった船があることに気付いた。カラーガムテープを使って、もっと飾りつけをしたいと考えたJ児、K児はテラスのテーブルで製作を始めた。途中でガムテープの接着面どうしがくっついてしまい、あきらめようとしていたJ児だが、5歳クラスc児が手伝ってくれたおかげで、製作を続けることができた。また、一人ではカラーガムテープをちぎることが難しいK児の様子を見て、b児が切り方を教えてくれた。

水を張ったコンテナをテラス前に設置することで、内履きのまま室内から出てすぐに遊ぶことができ、幼児がやってみたいと思うことをすぐに試せたのだと捉えた。その姿が、屋外にいた5歳クラス児の目にも留まったことで、年上の幼児とのかかわりが生まれたことは、想定していなかったことであり、うれしく感じた。普段なら保育室にあるカラーガムテープやペンを、テラスに設置したことで、その場ですぐに飾りつけをしたり色塗りをしたりして製作を楽しむことができ、その船を、すぐに水に浮かべて遊ぶことができたのは、まさにテラスという場だからだと感じた。副担任との振り返りでは、幼児がやりたいと思ったことが、できるだけその場で叶えられるように、どのように環境を整えていくかを検討していくことを共有した。

この頃、以前から生き物に興味をもっていたL児やM児が、たくさんの種類の生き物を捕まえるようになった。最初はダンゴムシやアリが多かったが、カマキリやシデムシなどを捕まえ、大切に飼育ケースの中に入れたり、落ちていたアゲハチョウの羽に興味深そうに見たりしている姿から、これまで以上に生き物への興味をもっているのではないかと捉えた。そこで、図鑑をすぐに手に取ることができれば、生き物の名前を知ったり、さらに興味をもったりするきっかけとなると考え、生き物に関する図鑑をテラスに置くことを副担任と話し合った。しかし、初めて図鑑にふれる幼児にとって情報が多すぎると感じたため、身近に見られる生き物が掲載されているページを抜粋して、生き物シートとしてテラスに置くことにした。

7月14日 あそびの時間

L児：「あ、すごい。虫がいっぱいだ」

担任：「Lくん、知ってる虫いるかなあ？」
L児：「うーん、これはこないだ捕ったやつだ」
担任：「どれ？」
L児：「カマキリ！前捕まえたよ」
担任：「そうだったね」
N児：「それ、ぼくも見たことある」
L児：「ハチもいる！あとこれは毒あるやつかなあ」
外で遊んでいたM児が来る。
M児：「それ何？」
L児：「虫がいっぱいいてるんだよ。これ見て」
M児：「すごい！」
L児：「これ、前僕が捕ったやつ」
N児：「どれ？」
M児：「あ、このちょうちょ、前見たやつだ！」
L児：「どれ？」
M児：「これ、羽が落ちてたやつでしょ？先生、これなんて書いてあるの？」
担任：「ア・ゲ・ハ・チョ・ウだって」
L児：「アゲハチョウ？」
担任：「うん、こないだ見ていたやつだよ。よく覚えていたね」
M児：「あ、これも見たことある！」
L児：「どれ？あ、それ僕も見た」

この日は、生き物探しに出掛けようとしていたL児が、テラスに置いてあった生き物シートに気付き、1枚ずつ広げて並べて見ていた。これまでに自分が見付けたことのある生き物や、知っている生き物を探して、担任に知らせていた。生き物が大好きなL児は興奮気味で、載っている生き物を1匹ずつ見比べていた。普段、あまり生き物探しをしていないN児も近くへ来て、興味深そうにその様子を眺めていた。そこへ、外で遊んでいたM児が通りかかり、生き物シートを見ているL児とN児の所へ寄って来た。一緒にシートを眺めると、以前見付けたチョウの羽と同じ模様に気付き、担任に名前を尋ねた。

これまで自分が見付けた生き物が、シートに載っているものと同じだと気付いた時、幼児は驚きと同時にとてもうれしそうな表情をしていた。「自分で見付けた」ということが喜びにつながっているのだと感じている。図鑑の一部を抜粋したシートは、一つにまとめておくことも考えたが、必要なシートだけ持ち運びすることも考えて1枚ずつにしておいた。初めにシートに気付いたL児は、全てのシートを床に並べて眺めていたので、数名の幼児で同時に見ることができ、共通の話題で話すきっかけとなったのだと捉えた。また、外で遊んでいたM児が、L児やN児の姿を見て、すぐにシートを囲んで話の輪に入ったのは、テラスが屋外からもうすぐアクセスできる場だったからだろう。

副担任との振り返りでは、これまで図鑑は絵本コーナー、もしくは保育室の本棚に置いてあり、室内にあるのが当たり前だったが、それをテラスに置いたことで、生き物を見付けた幼児が、すぐに生き物シートと見比べることができるし、生き物シートを見て「捕まえてみたい」という気持ちを高めることにもつながるのではないかとということが話題となった。

翌日、L児は飼育ケースを持ち、一人で大好きな生き物捕まえに出掛けた。しばらくすると、捕まえた虫と共にテラスに戻り、一人で生き物シートをじっくり眺め「今日捕まえたやつはこれかな。でもちょっと違うかなあ」と、自分がその日に捕まえた生き物を探していた。生き物が好きだという気持ちを、さらに高められるような場の一つとして、テラスの特徴を活かした援助を継続したい。

考察

テラスは室内で遊んでいる幼児が内履きのまま行ける場所であり、屋外で遊んでいる幼児がすぐに立ち寄ることができる場所でもある。これまで室内に置いてあったものを、室内と屋外のどちらからでも取りに行きやすい場所に配置することで、自分のしたいことに合わせて、必要な物を選択しやすくなったと感じている。それによって、牛乳パックを使った生き物捕まえのように遊び方を工夫するようになったり、L児のように生き物にさらに興味をもつようになったりするなど、それぞれの遊びを一層楽しむような主体的な姿が見られるようになった。また、屋外からも見えやすい場所であるテラスは、3歳クラス児だけの場所ではな

く、年上の幼児とのかかわりが生まれる場所にもなった。

幼児がしたい遊びを存分に楽しむことを願い、幼児の実態に合わせてテラスの特徴を活かした環境構成を行ってきた。これまで主に室内で使っていた材が、屋外の遊びや人とつながる場となり、テラスが遊びの拠点の一つになったと言えるのではないだろうか。

オープンカンファレンスでの際、他園の先生から「保育は鮮度」という言葉を聞いた。今、目の前にいる子がしたいことは何かをよく読み取り、その時、その場に合わせた援助をすることが大切だということだと捉えた。テラスの環境構成を行うにあたり、何度もこの言葉を思い出した。屋外で遊んでいた幼児にとって、必要だと思う物がある時、テラスにあればその気持ちが高まった状態で遊びを続けることができるし、知りたいことを調べたいと思った時、すぐに調べることができれば、その喜びがさらに高まるだろう。テラスを拠点とした遊びについては、まだ多くの可能性があると考えられる。幼児の興味や関心を大切にし、思いついたことや考えたことをすぐに試し、楽しいと思える遊びにつなげる環境をつくっていききたい。

<3歳クラス Ⅲ期 11・12月> 幼児の思いを読み取り、したい遊びを支える環境構成

これまでの保育の様子

Ⅲ期が始まった9月は、日差しが強かったため、テラスに設置したテントを日よけシートで囲み、暑さをしのぎながら遊べる環境を整えてきた。そこでは、子どもたちが色水づくりや折り紙遊び、生き物の観察などしており、テラスが遊びの拠点の一つとなっていた。ままごと遊びをする子どもたちは、料理をつくって担任や副担任に提供するだけでなく、その場にいる友達同士で「お母さん」「お姉ちゃん」などの役割を決めて「おうちごっこ」をして遊ぶようになってきた。Ⅲ期は「好きな遊びをしながら友達のいる場で遊ぶことを楽しむ時期」である。これまで以上に同じクラスの友達や年上の幼児への関心が高まり、かかわりながら遊ぶようになっていくのではないかと、副担任と共有し、幼児一人一人がどんな思いをもっているのかを、丁寧に読み取っていかうと確認をした。

11月に入り、気温が下がってくると、室内で遊ぶ幼児が増えてきた。製作用のテーブルを用意したり、空き箱や牛乳パックなどの廃材、ガムテープ、スズランテープ、お花紙などの製作用の材料を棚にまとめたりして、いつでも好きな時に製作遊びができるように環境構成を行った。

○児は自分で好きな遊びを見付け、入園してからいつでも楽しみながら遊んでいるように見えた。しかしある時、遊びへの思いを一生懸命伝えようとしている姿があり、それは担任の思い込みなのかもしれないと思うようになった。したい遊びが十分にできているのか、という視点で今一度○児の思いを読み取り、環境構成を通して支えることができれば、周りの人とかかわってさらに遊びの幅を広げたり、遊びに夢中になったりすることができるのではないかと考えた。

11月19日 あそびの時間

○児：「見て、長い電車！」

担任：「本当だ。長いねえ」

○児：「じゃあ、出発しまーす」

担任：「行ってらっしゃーい」

○児：「ガタンゴトン、ガタンゴトン」

遊戯室に行き、自分のつくった電車を持ちながら走る。

担任：「○くん、すてきな電車ができたね」

○児：「次は、糸魚川、糸魚川」

担任：「駅に停まるんだね」

○児：「うん」

担任：「あちらに、やま組駅があるみたいですよ」

やま組の保育室に電車を持ったまま入って行く。

○児：「わあ、すごい。線路だ」

担任：「本当だ、おもしろいね」

○児：「ガタンゴトン、ガタンゴトン」

担任：「やま組さんのお部屋は、線路があるんだね」

4歳クラスd児：「うん、これはeくんがつくったんだよ」

担任：「そうだったんだね。やま組のお友達がつくったんだ」

4歳クラスd児：「そう、テープを貼ってつくるんだよ」

○児：「すごーい」

線路の上を3周ほど走り、そら組の保育室に戻る。

○児：「さっき、やま組さんの部屋にあったやつ、つくってみたい」

担任：「線路？」

○児：「そう、ここにこれ貼ってつくるの」

担任：「なるほどね。そら組にも線路があったら楽しそう」

○児：「うーん、なんか、見えない」

担任：「そうだねえ、どうしようか」

○児：「やま組さんのは、色がついてたから、そういうやつの方がいいと思う」

担任：「そうか、こういうやつ？」

○児：「それぞれ！」

廃材コーナーで、似た大きさの空き箱をいくつか見つけた○児は、それを積んだり並べ替えたりしているうちに、大好きな電車をつくることを思いついた。空き箱を並べて、ガムテープで順番に貼り付けると、長い電車ができ、満足そうな表情を浮かべていた。広い遊戯室を走る○児は、運転手になりきっており、電車が大好きな○児にとって、思いが高まる遊びになるだろうと捉えた。担任は○児の姿を見て、4歳クラスの保育室でビニルテープを線路のように床に貼り、段ボールでつくった電車に乗って遊んでいたことを思い出した。やま組の保育室の床の線路を見れば、○児の電車ごっこへの思いがさらに高まるかもしれないと思い、担任は○児に声をかけた。他のクラスへ一人で入ることは、○児にとって少し勇気がいることかもしれないと思ったが、電車遊びで思いが高まっていた○児は、ためらわずにやま組に入った。床一面に張り巡らされた線路に、○児は驚きと喜びを感じていたようであり、線路の上をたどりながら、自分の電車を走らせていた。

4歳クラスの保育室で、十分に線路の上で電車を走らせた○児は、自分の保育室に戻ると、製作用に机の上に出してあったセロハンテープを床に貼り始めた。何枚か貼ったのだが、セロハンテープは透明であるため、どこに貼ってあるのかが分からない。○児は、4歳クラスで見たビニルテープが欲しいと言った。ビニルテープを使うのは初めてだったが、○児自身の「やってみたい」という思いを大切にしたいと考え、ビニルテープとはさみを渡すと、○児は見よう見まねで、夢中になってビニルテープで線路をつくった。

副担任との振り返りでは、やま組の保育室で見たものや体験したことを、すぐに自分たちの生活する場で試してみようとする○児の姿が話題となった。もしかしたら、遊戯室で電車を走らせるだけでも、○児には楽しい遊びとなっていたのかもしれない。そのため、やま組へ誘導するような声かけとなってしまったのではないかと気になったが、そこで新たな遊び方を知るきっかけともなったと振り返った。また、ビニルテープを提供したのは初めてだったが、○児が夢中になって線路づくりをしている姿から、よいタイミングだったのではないかと捉えた。この日は、1mほどの線路ができた。○児はやま組のように長い線路をイメージしているのではないかと捉え、貼ったものは後日続きができるように、そのまま残しておいた。

11月28日 あそびの時間

○児：「線路つくろう。線路のテープください」

担任：「これね。だいぶ長くなってきたね」

P児：「私もやりたい。先生、これと同じのが欲しい」

担任：「そうなんだね。一緒につくるのかな」

○児：「うん」

Q児：「いいな、わたしもやりたい。あのテープください」

○児：「もっと線路、長くするんだ」

担任：「そうかあ。みんなでやったら長くなりそう」

みんなでビニルテープを切ったものを床に貼り、線路をつなげる。

○児：「ガタンゴトン、ガタンゴトン」

担任：「長い線路になったねえ」

○児：「うん。あ、いいこと思いついた。これにひもを付けよう」

R児：「私も！こうやって引っ張ればいいんじゃない？」

数日かけて、○児は少しずつビニルテープの線路を延ばしていった。すると、○児と一緒にビニルテープを貼って線路づくりをする子や、○児と同じように廃材で電車をつくって線路を走らせたりする子が増えてきた。○児が廃材を使った電車に紐を付けて、線路の上を走らせるアイデアを思い付くと、同じようにまねをして遊ぶ子もいた。

○児が始めた線路づくりの遊びは、日を追うごとに、クラスの中で参加する子どもたちが増えていった。線路を共有して遊ぶ場面が見られるようになり、線路を介して○児とのかかわりができているように思えた。遊びの形跡を残しておくことで、○児だけではなく、他の子どもたちの遊びのきっかけをつくっていると感じた。

担任はこれまでの遊びを振り返ったり、友達の遊びに興味をもったりすることを願い、子どもたち全員の遊びの写真を掲示し、入れ替えていた。写真は、遊びを通して自信をもっている姿や、夢中になっている姿、友達と一緒に遊ぶ姿など、その子の育ちへの願いを込めて選択した。登園後に写真を見ている子も多く、○児の自信や他の子どもたちの遊びのきっかけづくりになることを願って、床にビニルテープを貼って線路づ

くりに楽しむO児の写真も掲示しておいた。

12月3日 あそびの時間

みんなの写真が貼ってあるコーナーの前でじっと写真を見ている。

O児：「あ、これつくりたいな」

担任：「おうち？前、みんなでつくったね」

O児：「そう、だからあの段ボール持って来よう」

担任：「着替える時に使うやつ？」

O児：「そう、前それでやったから」

担任：「そうだったね。でも着替える人がいたら使えなくて困るよね。どうしよう」

O児：「どこかにある？」

担任：「探しに行ってみる？」

S児：「え？何するの？」

O児：「段ボール探して、家つくるんだよ」

S児：「私も行きたーい」

T児：「私も家つくりたい」

保育室を出て、段ボールを探しに行く。

O児：「あれ？ここに段ボールがある」

担任：「本当だ、使っていいのかなあ」

S児：「使いたーい」

担任：「聞いてみる？」

O児：「失礼します。ここの段ボール、家をつくりたいから使ってもいいですか」

事務職員：「そこにまとめてあるやつ？好きなだけ持って行っていいですよ」

O児：「ありがとうございます」

担任：「聞いてみてよかったね。たくさんあるね」

O児：「持って行っていいんだって」

T児：「やったあ」

S児：「私は、これとこれにする」

O児：「僕は、これがいいかなー」

自分が選んだ段ボールを保育室に運ぶ。

O児：「先生、ここ切って」

担任：「段ボールのここ？ちょっと堅そうだね」

O児：「そう、だから切って」

担任：「でも、このはさみだと難しそうだね」

O児：「うーん」

担任：「そういえば、こないだU君がうみ組さんに段ボール切ってもらっていたよね」

U児：「うん。段ボールカッターで切ってもらったんだよ」

担任：「うみ組さんに行けば切ってもらえるのかなあ」

U児：「そうだよ」

O児：「じゃあ、行ってみる」

11月下旬、ウレタンの積木や牛乳パックなどで、保育室の中で家づくりをしている子たちがいた。初めは2つのグループに分かれて、材料の取り合いをしていたのだが、一緒につくればいいのかとのアイデアが子どもたちの中から出て、みんなで一つの家をつくることになった。その時の写真を見て、O児はこの時のことを思い出したようだった。その際、着替え用の段ボールのパーテーションを使っていたのだが、着替えが必要になった時に使えなくなると困るので、他の方法を考えていくとよいのではないかと、副担任と振り返りをしていた。

O児は、きっとこの時の楽しかった遊びを再現したいと思ったのだろう。保育室に掲示をしていた写真から、O児が過去を振り返り、楽しみを見付けていたことが、担任はうれしかった。前回のように着替え用の段ボールは使うことは難しいことに気付くと、自分たちで探しに行こうとしており、家づくりへの思いの高まりを感じた。

これまで、子どもたちが扱いやすい素材や道具は、保育室の棚に置いておいたが、それ以外の物を使いたくなることもある。身近な担任や副担任に尋ねる他にも、他の物で代用したり、他のクラスに借りにいたりすることなどが考えられる。担任や副担任がすぐに提供することは簡単だが、友達に聞いたり、職員や年上の幼児の力を借りたりしながら、自分たちでできるような方法を一緒に考えていきたいと思った。

この日、O児はS児と一緒に5歳クラスの保育室へ行き、段ボールカッターで余分な部分を切ってもらい、自分たちの保育室へ戻って来ると、箱の中に入ったり、切ってもらった段ボールを立てたりして遊んでいた。副担任との振り返りでは、掲示した写真から自分がしたい遊びを見付け、自分たちで材料を探し、切ってもらいようをお願いをしたO児は、したいことへの実現に向けた主体的な姿なのではないか、と話題になった。家づくり用として譲ってもらった段ボールは、かなりの量があったため、子どもたちと一緒にどこに置いておくとういかを考えて、保育室の隅に保管場所をつくり、いつでも使えるように遊びの環境を整えた。すると、S児はそこから自分で段ボールを選んで毎日のように家づくりをして遊び、飾りや家具を付けるなどして楽しんでた。また、V児は、5歳クラス児に行くと、段ボールを切ってもらえることをO児から教えてもらった。O児の楽しみが、少しずつ周りの友達へ広がっているように感じた。

12月19日 あそびの時間

O児：「Wちゃん、あそこに当てよう」

W児：「うん」

担任：「これ、結構硬いみたいだけど、大丈夫かなあ？」

O児：「大丈夫だよ。あそこに当ててるだけだよ」

担任：「そうなんだね、当ててみたいんだね。さっき、こっち側にも当たりそうで心配しちゃったよ」

O児：「うーん」

W児：「じゃあ、これじゃなくて、折り紙を丸くしたら？」

担任：「なるほど、投げるものを変えるのね」

W児：「ほら、ボールできた」

担任：「本当だ、これはいいかも」

W児：「D君、できたよー」

O児：「いいねえ。あと、こないだやま組さんが投げてたやつみたいに、台があればいいんじゃない？」

担任：「そうか、的があればいいってことなのかな」

O児：「そうなんだけど、机は外のやつだからなあ」

担任：「そうだよね」

O児：「あ、これいいかも」

担任：「こないだの段ボールだね。使えそうかなあ」

W児：「どうするの？」

O児：「ここにこの落ち葉を貼って、当たったらばらばらってなるのは？」

担任：「落ち葉に当ててるってこと？」

W児：「ああ、いいね」

O児：「音になるかも。やってみたい」

担任：「うん、おもしろそうだね」

O児：「ここの葉っぱを貼ってみる」

W児：「いいね。私もやりたい」

保育室の隅に積み上げられたウレタン積み木をめがけて、使い終わったガムテープの芯を投げ、当たったり積み木が動いたりすることを楽しんでいたO児とW児。ウレタン積み木は数日前から出しており、ガムテープの芯が当たると揺れるので、そのスリルのようなものを楽しんでいるように見えた。しかし、このまま続けるとけがにつながる心配もあるため、どうすれば的あてが楽しめるのかを一緒に考えることにした。

投げる物に着目していたW児は、すぐに折り紙を丸めてボールをつくり、自信をもってO児や担任に見せた。O児は、そのボールのよさに共感しながらも、的に着目しているようだった。以前O児は畑の土を丸めて、机を傾けた的に向かって投げる遊びをしたことがある。もしかしたら、その遊びをイメージしているのではないかと捉えた。その時使った机に代わるようなものはないかを一緒に探していると、家づくりの時に使った段ボールに目が留まった。大きさもO児のイメージに合っていたようだった。

担任はこの時、段ボールに直接ボールを当てる遊びを思い描いていたのだが、O児は落ち葉を貼り付ける

ことを思いついた。落ち葉は、以前園庭で拾ったもので、かごに入れてあっていつでも使えるようになっていた。〇児は、これまでも落ち葉を手紙に見立てて遊んでいたことがある。ずいぶん前に拾ったものなので乾燥しており、手で簡単に形を崩せることを〇児は知っていたようだ。落ち葉にボールが当たると、ばらばらになるという遊びを思いついた〇児の発想に驚いた。さっそく段ボールに一枚ずつ落ち葉を貼り、手づくりのボールを投げると、見事に落ち葉がばらばらと下に落ちた。その様子を見て、やってみたいという子が集まり、次々にボールを投げて、落ち葉の的に当てていた。

この日の振り返りでは、新たな発想で友達と一緒に遊びをつくった〇児の姿が話題となった。落ち葉を的にすると、ばらばらと落ちることは、全くの想定外だった。段ボールや落ち葉などの素材を、子どもたちがいつでも使えるように環境を整えておいたことが、新たな遊びのヒントになったのだろうと捉えた。また「危ない」という理由で禁止をすれば、その遊びはそこで終わってしまう。しかし、ここで〇児は「危ないこと」をしたかったのではないだろうと捉えた。目の前の子どもたちはここで何をしたいのかをよく読み取り、したいことへの実現に向けた援助をしていくことが大切なのではないだろうか。

考察

何をして遊ぼうかと迷っている子、十分に遊べていないのではないかもしれないと思う子は、特に気にかけて援助しようと努めていた。〇児は服が泥だらけになるまで泥遊びをしたり、保育室の材料ボックスから好きな廃材を選んで製作をしたりしていたので、十分に遊べているのだろうと担任の目には映っていた。しかし、そのような姿だからこそ〇児が本当にしたいことが見えていなかったり、遊びの幅を広げる援助の機会を逃したりしているのかもしれないと感じ、〇児の思いを読み取ろうと努めてきた。

〇児の遊びの姿から、したい遊びを支えるための環境構成で大切なことは三つあると捉えた。一つ目は、床にビニルテープを貼った線路のように、遊びの履歴を残していくことである。〇児の遊びが継続したことで、クラスみんなに遊びが共有されたことにつながった。二つ目は、過去の遊びの写真を掲示しておき、いつでも誰でも振り返ることができる環境にしておくことである。願いをもって選択した写真によって、友達のいろいろな遊びを知るきっかけとなり、楽しかった遊びを想起してまた遊びたいという気持ちをもつことにつながった。三つめは、子どもたちと担任が相談しながら、遊びの環境をよりよくつくり変えていくことである。教師の意図だけつくっていくのではなく、子どもたちが遊びに至るまでの背景、それまでの経験、これからどうしたいのかという思いなどを多面的に読み取ることで、子どもたちの遊びの幅が広がったのではないかと捉えた。本園の共通認識の根っこ部分にあたる「教師の子ども理解」を大切にしながら、一緒に環境構成を行うことで、今後も子どもたちのしたい遊びを支えていきたい。

<3歳クラス IV期 1・2月> 遊びの過程として捉える発表会

これまでの保育の様子

3学期に入るとすぐに積雪があったため、子どもたちは、スキーウェアに着替えてそり遊びなどの雪遊びを楽しんだ。保育室では、廃材を使った製作遊びや、赤ちゃん人形を用いたままごと遊びなどを楽しむ子どもたちの他、テラスでは気温が低くなることによって水が凍った様子に関心をもつ子どもたちがいた。また、遊戯室では、大型積み木や一輪車、フラフープ、大縄などに興味をもち、年上の子どもたちが遊ぶ様子を見ながらまねて遊ぶなど、それぞれの子どもたちが、好きな場所で好きな遊びを見つけて遊んでいた。

2月に行われるお楽しみ発表会では、①遊びの中で楽しんでいること、見せたいことを発表すること、②友達と一緒に発表したり保護者に見せたりすることで表現する楽しさを味わうとともに、今後の遊びのきっかけとなるようにすること、③保護者に子どもたちの日常の遊びを知らせて幼児理解を深めることをねらいとしている。担任は、発表会は日々の遊びの延長線上にあり、ゴールではなく一つの通過点であると捉えている。そのため、決まったせりふを言ったり、動きをしたりするのではなく、子どもたちが好きな遊びに夢中になっている姿、うまくいかなくてもがんばる姿、やってみようと挑戦するなど、遊びの時間のありのままの姿を保護者に見てもらうことを願った。そこで、子どもたち一人一人の遊びの様子をこれまで以上に十分に読み取り、遊びに夢中になれるように支えていくことを副担任と確認した。

とはいえ、初めて発表会を経験する子どもたちなので、みんなの時間に発表会のイメージを共有し、広い遊戯室で遊ぶ機会を設けた。昨年度の発表会のビデオを鑑賞した時は、たくさんの観客の前に立つことに不安そうな表情を浮かべる子もいたが、5歳クラス（うみ組）の発表会のリハーサルを実際に見てからは、「早く発表したい」「そら組（3歳クラス）はいつやる？」と、発表会を楽しみにしている様子が伺えた。5歳クラスの子どもたちが、目の前で楽しそうに遊ぶ姿に引き込まれたのだろうと捉えた。引き続き何を楽しみとして遊んでいるのか子どもたち一人ずつについて読み取りながら、発表会で見せたい遊びを子どもたちに個別で尋ねた。担任との会話の中で、見せたい遊びを決める子どもたちもいた。子どもたちがどんな遊びを発表したいのかを概ね把握し、プログラムを構成していくことにした。

2月5日 みんなの時間

担任：「この前のうみ組さんの発表、楽しかったね」

X児：「そら組は、いつやるの？明日やる？」

担任：「Xさん、やってみたい？」

X児：「やりたい！」

Y児：「早くやろうよ！」

担任：「そうか、そら組さんも発表会ごっこやってみる？」

Z児：「やった！」

担任：「発表会ごっこで、何したい？」

A児：「私は、マットやりたい」

担任：「おもしろそうだね。やってみようか」

保育室の中に観客席をつくり、遊戯室からマットを運んで敷いた。

B児：「早くやろうよ！」

担任：「Bさん、やってみる？では、どうぞ！」

B児はマットの上を歩く。

担任：「Bさん、かっこいい！」

副担任：「素敵な歩き方ですね」

Z児：「次、もう行ってもいいの？」

担任：「はい、じゃあZさんどうぞ」

Z児は片足で跳びながら進む。

担任：「わあ、今度は片足跳びですね。最後まで行けたね」

副担任：「なるほど、そういう進み方もあるんだね」

C児：「私もやりたい」

担任：「どうぞ」

C児は両足で跳びながら進む。

副担任：「Cさんは、両足跳びだ！」

担任：「すごい！それもいいね」

この日は、手づくりのドレスを着て音楽に合わせて踊るダンスタイム、ペットボトルの手づくりこまを回すなど、子どもたちが発表会でしたい遊びをして、みんなで見合った。

子どもたちは、2学期の終わり頃、年上の子どもたちの遊びに入れてもらったことがきっかけで、マット遊びに興味をもち始めた。裸足になってマットの上を歩いたり、転がったりしながら遊んでいた。間を空けて二つ並べたマットの間を跳び越したり、バスや電車に見立てたりして遊ぶこともあった。マット遊びは、床とは違う感触を楽しむことができ、子どもたちにとって特別な遊びの一つになっていると捉えた。この日は、自分たちも発表会をしたいという子どもたちの思いから、保育室を発表会の会場に見立て、椅子を並べて観客席をつくることにした。マットを敷くと、最初に並んだB児は、マットの上を前を向いたままずっと歩いた。その後に続く子たちは、B児と同じように歩く子もいたのだが、片足跳びや両足跳び、走る、後ろ向きで進むなど、前の子どもたちとは少し違う進み方をするようになった。

最初にB児が歩いた時、担任も副担任も正直驚いた。「歩いただけ」なのかもしれないが、B児の自信に満ちあふれた表情、周りの子どもたちの笑顔がとても素敵だと感じたからである。マットの上は特別な場所であり、子どもたちにとって歩くこと自体が喜びになっている。担任や副担任が「かっこいい」「素敵」などと声をかけてその楽しさを共有したことで、他の子どもたちも「やってみたい」という気持ちが高まったのだろうと捉えた。どの子も、マットの上での友達の動きを見ながら自分の進み方を考えている様子から、見ることも遊びの一つになっていて、まさに遊びに夢中になっている姿なのだろうと捉えた。発表会でもこのように、自分のしたいことを楽しみながら遊ぶ子どもたちの姿を願った。

2月13日 お楽しみ発表会

製作遊びを終え、ステージにマットを並べた。

担任：「次は、子どもたちが大好きなマット遊びです」

X児：「やった！」

担任：「マット遊びしたいなと思う子は、こちらへどうぞ」

多くの子がマットの端に並ぶ。

教育補佐員：「Aさんは、行かなくていい？」

A児：「いい」首を横に振る。

D児：「ぼくも、いい」首を横に振る。

A児とD児は椅子に座って、他の子どもたちの様子を見ている。

副担任：「分かったよ、大丈夫だよ」肩にそっと手を置く。

お楽しみ発表会当日も、多くの子がマット遊びを発表した。並んでいるときから、わくわくした気持ちが表れていて、早くマット遊びをしたいという思いがあふれてくるようだった。子どもたちがマットに並び終わったが、A児とD児は席に座ったままだった。A児はマット遊びがしたいと担任に伝えていたので、当日も当然マット遊びをするのだろうと思っていた。しかし、教育補佐員が声をかけてもA児はD児と一緒に大きく首を横に振った。担任は、もしかしたら他の子どもたちの姿をみて、気持ちが変わるかもしれないと思い、マット遊びを始めた。

子どもたちは、保育室でマット遊びをした時のように、友達の様子を見ながら歩いたり跳んだりするなど、いろいろな進み方に挑戦した。その表情は、どの子もととても楽しそうで、保護者の方から大きな拍手をもらい、満面の笑みで自分の席へ戻って行った。A児とD児は椅子に座って、他の子どもたちのマット遊びの様子をじっと見ていた。A児は友達が前の席に座ると、その友達の間から一生懸命顔をのぞかせており、実際にマットの上にはいなくても、遊びを楽しんでいるように見えた。

子どもたちが発表会前にしたいと言ったことが、当日もしたい遊びになるとは限らない。副担任とも、このことについてはよく話をし、想定していたことである。A児とD児は、この日一輪車遊びを発表した。まだ自分一人では乗れないが、手すりにつかまりながら一輪車にまたがるその姿は、これからもっと乗れるようになりたいという前向きな気持ちが表れているように見えた。発表の形式にはとらわれず、当日の内容の変更にも柔軟に対応し、その時の子どもたちの気持ちに寄り添って支えることが大切だと考えた。A児とD児は、発表会での一輪車遊びをきっかけに、一輪車遊びにさらに興味をもつようになり、あそびの時間に何度

も挑戦するようになった。発表会後は、今後の遊びのきっかけとなるように、発表会の日に製作遊びで使った素材をすぐに使えるような場所に置いておいたり、マットを子どもたちでもすぐに運べる場所に配置したりしておいた。

2月26日 あそびの時間

マットを遊戯室の中央へ運ぶ。

Z児：「このマットを2つくっつけようよ」

X児：「いいね。やろう」

E児：「いいね」

担任：「何が始まるの？」

X児：「広くしてるんだよ」

B児：「やったあ。広い！」

担任：「なるほど、広くて楽しそうだね」

Y児：「私もやりたい」

靴下を脱いで、各々がマットの上を走ったり、でんぐり返しをしたりする。

B児：「楽しい！」

X児：「もっと走ろう！」

Z児：「ここで競争しようよ」

いろいろな方向から走り、ぶつかりそうになる。

E児：「Zくん、ぶつかりそうで危ない」

担任：「Eさん、大丈夫？確かにこれだとぶつかるかもしれないね。どうしたらいいかなあ」

X児：「えー！でも走りたいよねえ」

B児：「うん」

Z児：「じゃあ、ここを走ったら、こっちから戻ってくるってのはどう？」

担任：「そうか、行く場所を決めるんだね」

Z児：「そうすればぶつからないし」

担任：「なるほどね。みんな分かったかなあ？」

Z児：「ねえみんな、ここを通って戻ってくるんだよ。いい？」

X児：「こっちな」

E児：「いいよ」

マットの上で二人ずつ走り、マットの横を通って戻ってくる。

B児：「私、けんけんで行くよ」

担任：「いいねえ。かっこいい」

C児：「一緒に行こう」

Z児：「いいよ」

二人で同時にスタートする。

E児：「けんけんば、けんけんば」

担任：「Eさんは、けんけんばで進んでるんだ。おもしろいね」

E児：「うん」

X児：「私もやりたい。どうやってやるの？」

E児：「いいよ」

遊戯室で、数名が一緒にマットを運んでいた。これまで、3歳クラスの子どもたちだけでマットを運ぶことはほとんどなかったのだが、この日はZ児のアイデアにより、二つのマットを並べることになった。これまで自分たちが使ったことのないような広いスペースができ、子どもたちは大喜びで走ったり跳んだり、転がったりし始めた。しかし、いろいろな方向から好きな動きをするので、Z児とE児がぶつかりそうになった。担任がスタートの位置を決めたり、動きの流れをつくったりすることはすぐにできるが、自分たちで遊びをつくっていくよい機会だと捉え、あえて子どもたちにどうしたらよいかを尋ねてみることにした。すると、Z児がマットの横を通って戻るのとはどうかと提案した。

進む方向と戻ってくる方向が一緒になり、それぞれの好きな方法で安全に進むことができるようになった。そして、二つのマットを並べたことによって、一つのマットではできなかった二人で競争をするという遊び

も始まった。子どもたち自身で安全を考えた動き方を決め、二人で競争をするなど遊び方を工夫し、「けんけんぱ」という新しい進み方に興味をもって友達に尋ねるなど、子どもたちがより楽しい遊びにしようとしており、どの子の表情も自信に満ちていた。

この日の副担任との振り返りでは、発表会後にも自分たちでマットを用意して、新たな遊びを生み出す子どもたちの姿が話題となった。発表会のためのマット遊びではなく、発表会後にもその遊びが続き、さらに子どもたちの工夫で遊びが発展したことは、まさに担任や副担任の願う姿であったことに喜びを感じた。

考察

日々の遊びの中で、子どもたちがそれぞれ何に楽しみを見出しているのかを読み取り、子どもたちの主体的な発表とすることを目指した。遊びに夢中になることで自信をもち、「もっとやりたい」「お家の人にも見てもらいたい」という思いにつながるのだと考えたからである。幼稚園教育要領においても「行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること」と記されている。

発表会が遊びの過程と捉え、子どもたちが夢中になっている遊びは何かを十分に読み取ろうとしてきたが、一人一人が遊びに夢中になる様相はそれぞれであった。例えばB児は、マットの上を歩く感触や特別な感じを味わうことの楽しさが自信につながったし、A児は、その時に自分のしたいことを思い切り楽しんだ。当日の発表内容が変わることも受け入れて支えることで、ありのままの遊びの姿をみてもらえたのではないだろうか。

また、発表会は子どもたちが友達同士の発表を見合うことができる場である。改めて友達の遊びを見ることで、その遊びをまねしたり一緒に遊んだりするなど、発表会が新たな遊びのきっかけともなっており、まさに「生活に変化や潤いを与えている」のではないかと捉えた。発表会はゴールではなく、その場で、その時の子どもたちが何に、どのように楽しみを見出しているのかを保護者の方に直接伝えることができる機会である。これからも、子どもたちの遊びの延長線上にある行事を目指していきたい。

<4歳クラス V期 4・5月> 「やってみよう」とする姿を支える援助

これまでの保育の様子

4月は、4歳クラス児にとって保育室や担任が変わり、進級をした期待と新しい環境に対しての不安が入り混じる時期である。そのため、担任は、保育室には安心できるように昨年度使用していた親しみのある工作の廃材を置いたり、屋外遊びに目が向きやすいようにテラスの周りの外遊びの道具を用意したり、保育室の窓の棚に植物や動物の図鑑を中心に置いたりしていつでも使えるように環境を整えた。登園後、工作をして安心してから外遊びに出かけたり、外の遊び道具を使ってままごとをしたりする様子が見られたりした。進級して不安な気持ちもあるが、「やってみよう」とする姿も強い時期であるからこそ、チャレンジする思いを大切に支えていきたいと考えた。

副担任とは、新しい出会いを大切に一人一人をゆっくり理解し、遊びを通して興味のあることは何か一人一人の「やってみよう」を読み取っていくことが大切だということを共有した。そこで、日常生活の中で、やってみようと思えるようなことを広げるようにしたいと考え、帰りの会で、春の草花についての絵本の読み聞かせを行った。

読み聞かせをした翌日、A児は、草花や生き物に興味をもったのか植物探しに出掛けることが多くなった。知らない植物を見付けると、保育室にある植物の図鑑を手に取り、植物の名前を調べていた。4月下旬、A児はそら組にヨモギについての本があることに気づき、「ヨモギの絵本があったよ」と4歳クラスの保育室に持ってきた。春の草花についての絵本の読み聞かせを聞いて、ヨモギに興味をもったのではないかと捉えた。A児の姿を見て、ヨモギの何に興味をもっているのか読み取っていくことを副担任と確認した。

5月1日 あそびの時間

A児：「ヨモギの葉どこにあるのかな」
担任：「どこにあるのかな？誰か知っているかな？」
B児：「この前、うみ組がヨモギ団子もってきたよ」
A児：「うみ組なら知っているかもしれない」
聞きに行く。
A児：「ヨモギどこにあるの？」
年長クラスa児「ヨモギ？ヨモギはこっちにあるよ。ギザギザの葉っぱ」
B児：「これかあー」
担任：「ありがとう。採ろう。採ろう」

A児はB児とヨモギが載っている図鑑をもって外に出掛け、いろいろな種類の葉の中からヨモギと思う葉を探し手に取ったが、これが絶対ヨモギの葉だという自信がなく、迷っているように見えた。担任は、その場にいたが、子どもたち同士のかかわりの中で見付けた方が「やってみよう」という思いが強くなるのではないかと考え、「誰か知っているかな？」と声をかけるだけにした。すると、うみ組からもらったヨモギ団子のことを思い出し、年長クラスa児に聞いてみることになった。

年長クラスa児から教えてもらったことでヨモギの葉を知り、採ることができた。ヨモギの葉で何をしたいのかA児の思いを知るため、「どうするの？」と問いかけることにした。A児は、葉を握りしめながら、「お茶を作る」と答えた。担任は、以前うみ組からヨモギ団子のお裾分けがあったことから、ヨモギの葉で「ヨモギ団子を作りたい」と言うことを予想していた。しかし、担任とA児たちとの思考の方向性は違い、A児もB児もお茶を作りたいと考えていた。「やってみよう」とする気持ちは、自分でもできるという思いと自分にとって身近であることからスタートするのではないかと捉え直した。

テラスに戻ったA児は、お茶をつくり始めた。担任は、A児の言うお茶づくりはどんなことなのか読み取りたいと思い、その様子を見守っていた。A児は、採ってきたヨモギの葉を一枚ずつちぎり、コップの中に浮かべヨモギ茶を完成させた。担任は、A児のなかでは、葉を水に浮かべることがお茶作りであることだと捉えた。

副担任との振り返りでは、A児の今の楽しみは、ヨモギ団子を作ることで、葉から色を出すお茶作りでもないことを確認した。しかし、ヨモギのお茶作りと同時に、水の中に赤土を入れて色を付ける様子があったため、色を付けることに興味をもったのではないかと話し合った。

翌日から5月の連休に入ってしまうため、「やってみよう」が続くにはどうすればよいかを考えた。そこで、

お茶遊びに必要な透明なプラスチックコップ、グラス、急須などを用意しておくことで、ゴールデンウィーク明けにまたお茶遊びをするきっかけになることを願った。

5月14日 あそびの時間

A児：「先生、色が付いたよ」
B児：「わあー。すごい色」
A児：「コップに入れて。先生飲んで、飲んで」
B児：「うみ組なら知っているかもしれない」
担任：「どうしたら、色が付いたの？」
A児「水の中に草を入れておいたんだよ」
B児：「ただ、それだけ」
A児：「ヨモギも色が付くのかな」
B児：「そうだね」
A児：「やってみよう」
A児：「色が出ない。葉っぱをもみもみしてみよう」
B児：「色、出ないね」
担任：「こんなゴリゴリする道具もあるけど」
A児：「それ貸して」
ヨモギの葉をすり潰した。
A児：「匂いもする」
A児は、ゴリゴリしたヨモギの葉ごとコップに入れ水を入れた。
A児：「緑色の色が出たよ。ヨモギの匂いもする」
担任：「えー！どんな匂い？」
A児：「ほら、かいでごらん」
担任の前にコップを持ってくる。
担任：「ヨモギの葉ってこんな匂いがするんだね」
A児：「草の匂いと違うでしょ」
担任：「そうだね」

この日の前日に、ヨモギではない葉を採ってきたB児は、大きな容器に水と葉を入れた。この日は、「ジュースだよ」と言いながら遊び、翌日にも遊ぶため葉を入れたまま片付けておいた。翌日、遊びの続きをしようとして容器を出し、コップに注ぐと色が付いていることにA児が気付いた。容器に入っている葉がヨモギの葉ではないことが分かっていたA児は、「ヨモギでも色が付くかな」と言った言葉から、色が付くことが楽しくなり、さらに「やってみよう」と考えたのではないかと捉えた。そこで、やま組の遊び道具として出ていなかった、すり鉢を出し「ゴリゴリする道具もある」ことを伝えた。すると、以前、友達がすり鉢で木の実や葉をすり潰している場面を遊びながら目にしていたことで、「貸して」とすぐに答えたのだと捉えた。すり鉢で、ヨモギの葉をすり潰し、水を入れると、うっすらではあったが、ヨモギの葉の色が付いたお茶をつくることができた。そして、すり鉢ですることによってヨモギの匂いにも気付くことができた。ヨモギをすり潰したときに出てきた匂いを担任も一緒に体験し、発見を共有することができたことで、新たな「やってみよう」につながったのではないかと捉えた。

ヨモギをすり鉢ですり潰す体験を通して、副担任との振り返りでは、花などを使って他の遊びの中にも取り入れられていくのではないかと共有した。さらに、ヨモギの匂いについても気が付けたことは、すり鉢ですり潰したからこそだと捉えた。遊びの中での「やってみよう」を支えていくとき、幼児が何に心を動かされているかを感じ取り、そのタイミングで道具などを出して思いを支えていくことが大切だと感じた。また、幼児が心を動かされたことを一緒に喜び合うことが、次の「やってみよう」という意欲につながるのではないかと捉えた。

今後について副担任とは、A児がヨモギの匂いに心を動かされている様子があったので、実際にヨモギ茶を飲む体験をしたら、A児の心が動き新たな「やってみよう」に発展していくのではないかと相談した。後日、おやつ時間にヨモギ茶を飲む体験ができるよう準備をして、みんなでヨモギ茶を飲んだ。

5月22日 あそびの時間

やま組の子どもたちは、園舎裏に行き BBQ 遊びをしていた。それを知ったA児。

A児：「BBQにお茶をもっていこう」

A児：「ペットボトル貸して」

担任：「何に使うの？」

A児：「ヨモギのお茶を作って入れるんだよ」

保育室においてあったヨモギ茶のペットボトル三本を全て持ち、今日、自分がすり鉢でゴリゴリして作ったヨモギのお茶をペットボトル三本全てに満タンに入れた。

A児：「よしこれで完成。持って行くよ」

B児：「コップで飲むでしょ」

A児：「そうだね。コップを用意して、出発だ」

A児とB児が、園舎裏に行く。

A児：「ヨモギ茶持ってきたよ。」

B児：「みんなで乾杯しよう」

「乾杯！」

A児：「ヨモギの匂いがするでしょ」

C児：「ホントだ。するね」

A児は、ヨモギ茶のペットボトルを貸して欲しいと言ってきた。前日のおやつ時間に、ヨモギ茶を飲んだため、ヨモギ茶のペットボトルが欲しかったのではないかと読み取った。その日、園舎裏では多くの4歳児クラスの幼児が集まり、BBQ 遊びを楽しんでいた。そこに、A児とB児が自分で作ったヨモギ茶を持って行き、みんなと飲みたいという思いがあったのではないかと振り返った。荷車にプラスチックコップとペットボトルを入れ、大事そうに運んでいき、その場にいた友達にプラスチックコップを配りヨモギのお茶をついで乾杯した。前日のおやつ時間に、みんなでヨモギ茶の匂いがすることを経験していたこともあり、みんなに自分のつくったヨモギ茶も匂いがするんだよということを伝えたかったのかもしれないと捉えた。

副担任との振り返りでは、前日のおやつで実際にヨモギ茶を飲み、ヨモギの匂いに気が付いたA児は、自分でつくったヨモギ茶も匂いがあるということをみんなに伝えたいと思い、園舎裏に持って行ったのではないかと振り返った。実際にヨモギ茶を飲む体験は、A児の次の「やってみよう」につながる種まきの援助だったのではないかと振り返った。

考察

担任は、春の草花の本の読み聞かせから、「ヨモギを使ってヨモギ団子をみんなでつくりたい」という願いになるだろうと考えていた。しかし、A児は、ヨモギ団子ではなく「ヨモギ茶」をつくりたいという願いをもった。ヨモギ茶を繰り返しつくる経験の中で、新しい発見をし、さらにチャレンジしたいという目標を見付け、目標達成に向けて遊び込んでいく姿があった。そして、色が出てくことや匂いがあることなど新たな発見に気が付くことができた。A児が、チャレンジしたいと思ったときに、タイミングよく透明プラスチックコップ、すり鉢などの道具の援助ができたことや一緒に遊びに加わり、感動を共有することができたことで「やってみよう」が続き、支えることができたと振り返る。また、担任と子どもたちの願いが別のものになった時、幼児の思いを支えられるように道具などを準備しておき、臨機応変に出せるようにしておくことや子どもの思いを読み取り寄り添っていくことが必要だと感じた。幼児の発想は担任の想像をはるかに超えていき、それを受け入れて、対応していくことの大切さを感じた。

「やってみよう」を支えた援助は、三つあると考える。一つ目は、タイミングのよい環境構成である。幼児の遊びの読み取りをじっくり行い、「やってみよう」とするであろうことを予想し、材料や道具などの環境を整え、タイミングよく準備したり、出したりしておくことが大切だと考えた。二つ目は、種まきの重要性である。芽が出てくるか、こないか分からないが、事前にたくさんの種まきをすることが大切であったと振り返る。今回、ヨモギ茶を飲むおやつ活動を設定したように、種まきをすることで、いろいろな「やってみよう」を無限に広げることができる。担任が園児に体験してほしいと思う気持ちと、園児それぞれの「やってみよう」と思うことは、時には異なることがある。それは、幼児同士も同じである。「やってみよう」が違うからこそ人に伝えるかわり合いが生まれたり、新しい体験や気付きにつながっていきついでと捉え直した。三つ目は、教師が、遊びの輪の中に加わることである。遊びの輪の中に入って、子どもたちの心の動きをじっくり読み取り、喜びや達成感、発見などを一緒に共有し、一緒に心を動かすことである。先生も驚いたことを発見できたということが、子どもたちの喜びや自信となり、次の「やってみよう」につながる一つなので

はないかと捉え直した。

カンファレンスの中で、遊びが続かないということが話題になったときがあった。子どもの心の動きの変化をじっくりと読み取ること、先を急がず、子どもが「やってみたい」と思ったタイミングを見極めることが大切であることではないかと話し合った。そのカンファレンスから、今振り返ってみると、A児の「ヨモギ茶を作りたい」という思いを支えたことは間違いではなかったと振り返る。

<4歳クラス VI期 6・7月> 子ども同士のかかわりを支える援助

これまでの保育の様子

6月に入り、4歳クラスの幼児は、料理づくりや生き物捕まえ、飼育などの遊びを楽しんでいた。一緒に遊ぶ中で、友達と自分の遊びについての思いの違いでトラブルになることも多くあった。副担任との振り返りでは、トラブルになったときには、お互いの思いがどのようなことだったのか話を聞いたり、相手の思いを伝える橋渡し役になったりして、お互いの思いに気が付けるように支えていこうと方向性を確認した。また、VI期は、「教師や友達と一緒に遊びや生活をつくる時期」である。一人一人の遊びや思いを大切にしながらも、子ども同士で対話をしながら遊んだり、遊びを広げたりしていく姿を願って援助していこうと保育の方向性を確認した。

D児は、保育室では工作、園庭ではカエルなどの生き物捕まえを楽しそうにして遊んでいた。D児が遊んでいる場所の近くにも友達はいた。しかし、担任には、友達と相談したり会話したりしながら遊んでいるのではなく、一人で遊んでいるように読み取れた。毎日のそのような姿から、担任は、D児が自分の遊びに夢中になって遊んでいる姿を肯定的に捉えながらも、他の子どもたちとかかわりながら遊んでほしいという願いもあったため、これでよいのだろうかという疑問をもつようになった。

副担任とは、D児に寄り添いながら、自分がやりたいことを自分の言葉で言うことが大切であるということとを伝え、友達とのかかわりを支えていこうと援助の方向性を確認した。

6月18日 あそびの時間

D児：「Fちゃん、遊ぼう」

F児：「Gちゃんと遊ぶ約束したの」

D児：「・・・」

F児：「Dちゃん。毎日遊んでいるでしょ。だから、今日私は、Gちゃんと遊びたいんだよ。ずっと同じ友達とではなくて、他の友達とも遊んでいいんだよ。だから、Dちゃんも他の友達と遊んでみたら。私は、Gちゃんと遊びたいの」

D児：「・・・」 うつむきかげんで、悲しい表情をしている。

F児：「今は、遊べないけれど。また、あとで遊ぼうよ。いい？」

D児：「・・・」

F児がD児の所に近づいてくる。

F児：「ね」

D児：「・・・。うん」

D児は、その場所から遠ざかり、別の場所に行く。

担任：「Dちゃん。Fちゃんと遊びたかったの？」

D児：「うん」

担任：「そうだったんだね。でも、今日は、Fちゃん、Gちゃんと遊びたかったんだね。」

D児：「うん」

担任：「そうだったのか」

H児：「どうしたの？」

担任：「Dちゃんね、Fちゃんと遊びたかったんだって。でも、Fちゃん他の友達と遊ぶ約束をしていて遊べなかったんだよ。」

D児：「うん」 下を見ながら話を聞く。

H児：「そういう時もあるよ。僕もある。約束してたなら仕方ないよ」

担任：「Hくんもそんな時あるの？」

H児：「うん。僕もある」

D児：H児の方に視線をあげ、話を聞く。

担任：「そんな時どうした？」

H児：「ぼくは、怒って遊んでほしいって言った時もあったけど、違う友達と遊んだよ」

担任：「そうなんだ。怒ってたこともあったの？」

H児：「だって、遊びたかったから。怒ってもいいんだよ」

担任：「そっか。自分の気持ちを言っていっていいこと？」

H児：「うん。言っていいいんだよ。けんかはしない方がいいけどね」

担任：「そうなんだね。」

D児：「うーん」 H児の方をしっかりと見ながら、ほんの少し、軽くなずく。

D児はF児と一緒に遊ぶことが多くあった。外の池でカエルを捕まえ、図鑑をつかって、調べたり、土でクッキーづくりをしたり、工作をしたりして遊んでいた。D児は、F児と一緒に遊んでいることに安心しているようであった。D児は、F児に近づいていき、そっと「遊ぼう」と自分から声をかけた。しかし、F児はいつもの反応とは違って「Gちゃんと遊ぶ約束をした」と言った。D児が次の言葉に困っていると、F児は、自分の思いをD児にはっきりと伝えた。この会話を聞いていた担任は、D児の思いに寄り添いF児にD児も一緒に遊ぶことを提案しようか迷ったが、F児が自分の気持ちををはっきりと伝えたことを大切にしたい思いもあり、声をかけることをやめた。そして、その場から離れたD児に話をすることにした。D児は、F児がしている遊びの中に入りたかったのか、F児と遊びたかったのか思いを聞いた。D児は、F児と遊びたかった自分の気持ちを担任に伝えることができた。担任は、F児と一緒に遊ぶことができなかったD児の気持ちに共感しながらも相手の気持ちに気が付けるチャンスなのではないかと考えたため、F児の気持ちもD児に分かるように伝えた。また、あとでなら遊べると言っていたことを話していると、D児と話をしている様子が気になってH児が近づいてきた。H児は、この少し前の時期に、遊びたいと思っていた友達に声をかけても断られていた。担任は、H児ならD児の気持ちに共感してもらえるかもしれないと思い、今のD児の状況をH児に説明した。すると、H児は、僕もあると答えた。担任は、H児が友達と遊べない時に、自分の気持ちを伝えていた場面を思い出し、もしかしたら、どうしたらよいか解決方法を見つけているかもしれないと考えたため、「そんな時どうした？」と聞いてみることにした。すると、「怒ってもいいんだよ」と答えた。D児には、自分の思いを伝えてよいということをメッセージとして伝えたかったため、担任は「自分の気持ちを言っていないってこと？」と言葉をかえて質問した。D児は、担任とH児の話をはじめはうつむき加減で聞いていたが、H児が「僕もある」と話し始めた頃から視線が上がりH児の方を見て話を聞いていた。そして、けんかはしない方がいいけれど、自分の気持ちを言っていないと言った時には、軽くではあったがうなずいている様子もあった。

この日の振り返りで、副担任にD児がF児と遊びたかったのに遊びに入れなかったことを共有した。一緒に振り返る中で、以前までは、大人とかかわっていることの多かったD児が、友達とかかわることが多くなってきていることなのではないかと捉え直した。H児が、自分の体験を通して自分の気持ちを言ってよいことを伝えてたことは、D児もF児と遊びたい思いがあるのと同じように、F児にも思いがあることを知っていくきっかけになったと捉えた。また、H児の話から友達同士で、自分の気持ちを伝えてもよいということを実体験から知れたのではないかと考える。そして、断られることは自分だけではなく、他の友達もされていることに気が付くことができたよい機会だったと振り返った。今後、D児の気持ちに寄り添うことを続けながら、相手の気持ちも伝えたり、D児の気持ちを言葉にしたりしていけるように援助していこうと援助の方向性を確認した。

6月25日 あそびの時間・片付けの時間

保育室F児が他の友達とショーごっこ遊びをしている。

D児：「Fちゃん。入れて」

F児：「ショーごっこしているの。Dちゃんもやる？」

D児：「うん」

F児：「先生はここに座って聞いててね」

担任：「分かったよ。楽しみ」

しばらくショーごっこをしている。

F児：「ね。声が小さいから大きな声で歌おう」

D児：「私は、ピアノするね」

F児：「ピアノ？わかった。せーの」

みんなは、歌を歌う。F児は、ピアノの伴奏を階名で口ずさんで歌っている。

F児：「Dちゃん。歌を歌ってないじゃん」

D児：「私は、ピアノをやりたいの」

F児：「でも、歌が小さくなるじゃん」

担任：「Dちゃん。どうしてピアノを歌いたいの？」

D児：「この曲のピアノが弾けるんだけど、近くにはピアノがないから歌ったの」

F児：「えっ。Dちゃんこの曲のピアノ弾けるの？」

D児：「うん。前の幼稚園で習っていたんだよ」

担任：「素敵な伴奏だったもんね」

I児：「うん」

D児：「ピアノやってもいい？」
F児：「じゃあ、いいよ。マイク作るから」
片付けの時間になっている
担任：「ピアノ素敵だったよ。ピアノしたいって言えてよかったね」
D児：「うん」

D児は、保育室の中で、椅子を並べてショーごっこをして遊んでいるF児を見付け、自分から「入れて」と言って遊びの中に入っていった。音楽の好きなD児は、ステージに乗って友達と歌を歌うことを楽しんでいる様子だった。D児は途中で、ピアノ伴奏を口で歌いたいとみんなに伝え、口ずさみながらショーに参加していた。しかし、F児は友達と大きな声で歌を歌いたいと考えていたためピアノ伴奏を口ずさんでいるD児に「歌っていないじゃん」と言った。D児は、少し困った様子であったが、勇気をふりしぼって小さい声で「私は、ピアノがやりたいの」と自分で伝えることができた。しかし、「歌が、小さくなるじゃん」と言われ、どうしてよいか迷っているD児を見て、担任は、D児がやりたいことだけを伝えるのではなく、やりたい理由をF児に伝えられたらよいのではないかと考え、「どうしてピアノを歌いたいの？」と聞いてみることにした。D児が「ピアノ伴奏を習っていた」ことを伝えるとF児は驚いた様子だった。担任は、理由を話せたD児を支えるには、担任は遠くから見守るか、それとも遊びの中の一員として声をかけるか迷った。観客として遊びの中にいたので、「すてきな伴奏も聞こえたね」と一緒に聞いていた周りの観客に声をかけた。結果的に周りにいた友達の観客も「うん」と言ったので、D児はさらに「ピアノやってもいい？」と自分の思いを伝えられたのではないかと振り返る。自分の思いを伝えられたD児の育ちを本人に伝えられたらと思い、片付けの時間に「ピアノしたいって言ってよかったね」と伝えた。

自分の思いを伝えられたD児の背景には、6月18日のH児の「自分の気持ちを言っていんだよ」と言われたことがD児の遊びの中でののかかわりにつながっていると振り返った。自分の思いをはっきりと伝えていんだよということが体験を通して知ることができたと思う。そして、自分の伝えたことを友達が受け入れてくれたことで、D児も友達を受け入れることができるようになってほしいと願った。

7月11日 遊びの時間

透明カップにお花紙と水を入れたり、コーンの上に折り紙でつくったアイスのをせたりして保育室でアイスクリームづくりをしている。

G児：「これはね、いちごアイス。これは、ぶどうアイスだよ」
D児：「コーンの上にいちごのアイスつくったよ。トッピングもしたの」
担任：「トッピング？どこどこ？」
D児：「ここだよ」
担任：「素敵だね」
G児：「私も、トッピングしよう」
たくさんできたアイスをトレーにのせて、保育室の出窓の所に持って行く。

G児：「いらっしやいませ。アイス屋さんですよ」
D児：「いらっしやいませ。アイスはいかがですか」
G児：「あまりお客さん来ない」
担任：「どうしたら来るかな」
D児：「お店屋さんって気が付かないのかな」
F児：「そうだね」
D児：「じゃあ、看板をつくろう」
G児：「そうだね。画用紙とペンが必要」
画用紙とペンをもち、G児は文字を書き始める。D児は、止まっている。

F児：「何て書きたいの？」
D児：「アイス屋さんって書きたいけど、書けない」
F児：「『あ』は、こうかな。どうだったかな」
担任：「だれか書ける人いるかな」
F児：「G児ちゃん、『あ』ってどう書くの？」
G児：「『あ』？こうだけど」
D児：「ん〜」
G児：「書いてあげようか」
D児：「うん。書いて」

D児：「G児ちゃん、これも貼って」
G児：「いいよ」
D児：「いらっしやいませー」

この日のD児は、F児やG児たちと一緒にアイスづくり遊びをしていた。カップやコーンの容器を使い、アイスをつくっていた。D児は、前日もコーンアイスづくりをして遊んでおり、この日はコーンアイスにトッピングをして遊んでいた。完成したたくさんのアイスを、トレーにのせ、出窓の所に持って行き、アイスクリーム屋さん遊びが始まった。「いらっしやいませ。アイス屋さんですよ」と声を出してもお客さんがあまり来なかった。G児の「あまりお客さんが来ない」という言葉から、自分たちの作ったアイスを多くのお客さんに売りたいと考えていると読み取り、担任は、「どうしたら来るかな」と問いかけることにした。すると、D児は「気が付かないのかな」とつぶやいた。この言葉から、D児が相手の気持ちを考えるようになってきたのではないかと振り返った。また、この頃になると『あ』ってどう書くの？」「私、できない」など、自分が苦手としていることを相手に伝えられるようになってきた。そのことで、友達との会話が生まれた。そして、助けたり、助けられたりする中で「できない」と言っても恥ずかしくなく、助けてもらえるという子どもたち同士の安心感もできてきたからではないかと読み取った。

副担任との振り返りでは、D児の育ちを喜んだ。そして、自分の思いを出せるようになるためには、安心できる子どもたち同士の人間関係づくりを支えていくことが大切であることを再確認した。

考察

友達とのかかわりが生まれるには、自分のやりたい遊びに夢中になることが大切だと感じた。遊びを十分楽しむことで、友達や先生に伝えたいという思いが出てきて、友達との自然なかかわりが生まれたのではないかと考える。

6月18日、F児がD児に今日は他の友達と遊びたいから遊べないと伝えた場面があった。一見、遊びの中でのトラブルのように見えた。担任は、介入したい思いを強くもったが、見守ることを選択した。子どもたち同士のかかわりの中で、トラブルのように見えたことは、D児にとって、相手にも理由があるということを知っていく実体験になったと振り返る。かかわり方は、担任や大人が教えたりつないだりして解決していくのではなく、友達同士がかかわりながら体験していくことで、かかわり方のバリエーションを学び、広げていくものと捉え直した。担任は、幼児の気持ちに寄り添い、共感したり、言葉の裏にある思いを引き出して相手の気持ちを伝えたりしたりするパイプの役のように援助していく大切さを感じた。

また、H児の話をよく聞いていたことから、かかわりとは、直接的に会話したり、遊んだりしているだけがかかわりではなく、言葉は交わさなくても、聞いたり、うなずいたり、場を共有したりしていることもかかわりの一つだということを改めて再確認した。今後、言葉にならなかった思いも支えていこうと気持ちを新たにした。

D児は、時間が経つにつれて自分の苦手としていることも伝えることができるようになってきた。伝えられるようになるまでには、「できない」ということを伝えても、周りの友達は、「大丈夫だよ」「何ができないの？」などと肯定的に捉えてもらえるという安心感も大切だったのではないかと捉え直した。安心感の一つには、人とかかわりが大切だとオープンカンファレンスで話題となった。子どもが担任に抱く安心感を大切にして保育をしていたが、子どもたちのかかわりを支えるためには、子どもたち同士の安心感もつくっていくことが大切だと捉え直した。

<4歳クラス VI期 11月> 遊びに「夢中になる」姿を支える環境構成

これまでの保育の様子

4歳クラスのこの時期は、「友達と思いを伝え合う時期」である。遊びを通して、自分のしたい遊びやなりたい役割を決め、友達の思いも受け入れながら数人で同じ遊びを楽しんでいる子どもたちがいた。一方で、担任や副担任の近くにいて、自分のしたい遊びをしているのだろうかと気にかけていた子どももいた。副担任とは、担任や副担任と一緒にいる安心感を大切にしながらも、自分のしたい遊びが見つけ出せるような保育室の環境構成や、自分から徐々に友達とかかわれるような援助をしていけるように副担任と保育の方向性を確認した。

J児は、遊びの時間、担任の近くにいることが多くあった。担任や副担任と一緒に遊ぶことの安心感を大切にしながらも、まずはJ児が自分からやりたいと思える遊びの環境をつくることで遊びに夢中になる姿を支えていきたいと長期的な願いをもった。

11月17日 あそびの時間

J児は登園後、朝の準備が終わると担任の近くに来る。
担任：「Jちゃん。何して遊ぼうか」
J児：「・・・」
担任：「折り紙で食べ物がつくれる絵本があるよ」
J児は、絵本を手に取り全てのページを見る。
J児：「先生。黄色い折り紙ちょうだい。もう、売り切れてない」
担任：「何枚必要？」
J児：「2枚」
担任：「黄色の折り紙、2枚どうぞ」
J児は、見ている絵本のお寿司づくりのページを開く。
J児：「たまごのお寿司をつくりたい」
担任：「うん。素敵だね。黄色の折り紙の他に、何か必要なものはある？」
J児：「ティッシュが必要って書いてある」
担任：「ここにありますよ」
J児と担任は、絵本を見ながらお寿司をつくる。
J児：「たまごのお寿司ができたよ。ティッシュがご飯で、黄色の折り紙がたまご」
担任：「本物みたいで、おいしそうだね」
J児：「また、つくる。黒いのもつけたい」
担任：「海苔もつけたいってこと？」
J児：「うん」
たまごのお寿司を2つつくる。
J児：「次は、オレンジの折り紙が欲しい」
担任：「オレンジは何のお寿司？」
J児：「サーモンだよ」
担任：「先生もサーモン好き。食べたい」
J児：「今つくるから、待っててね」
J児は、オレンジのお寿司をつくり終わる。
J児：「いっぱいつくったら先生の所に持っていけない。お皿が欲しい」
廃材置き場に探しに行き、空き箱を見つけ並べる。
J児：「持ってきたよ」
担任：「おいしそう！」

J児は登園後、朝の準備を済ませると担任のそばに来て、他の友達が遊んでいる様子を見て過ごすことが多くあった。J児は、折り紙遊びをすることが多かったため、保育室の机の上には、何色かの折り紙を用意し、遊び出せるように準備してあった。担任は、折り紙を折っている友達の様子を見ていることから折り紙を使って遊びたいのではないかと読み取り、折り紙で折ることのできる食べ物の本があることを知らせた。J児は、絵本に興味をもった様子で、ページをめくりながらじっくりと見ていた。すると、J児は、黄色の折り紙が欲しいと言った。いつもであれば、「黄色の折り紙は何に使うの？」と会話をしてから渡していたが、今のJ児に質問をすると質問に対してどう答えようかと考え込んでしまい、やりたい遊びができなくなってしまうのではないかと考え、欲しい枚数を手渡して様子を見守ることにした。すると、絵本のお寿司のページを指さし、「たまごのお寿司をつくりたい」と言ってきた。二人で絵本を見ながら、折り紙以外に必要なもの

のを準備したり、どのような折り方なのか見たりした。J児は、絵本に書かれている折り方をまねしながらたまごのお寿司をつくった。また、「黒い折り紙も欲しい」と言い、たまごのお寿司に海苔をつけて完成させた。自分でつくったお寿司を見ながらにこにこ微笑んでいた。その姿から、すべて自分でつくったといううれしさと、満足感が読み取れた。そして、「次は、オレンジの折り紙が欲しい」と伝えてきた時の生き生きとした表情や、声のトーンは、「黄色の折り紙が欲しい」と言ってきた時とは違い、自信に満ち溢れているように読み取れた。たまごとサーモンのお寿司が手で持ちきれないほどたくさん完成したため、N児は廃材置き場に1人で行って、容器を探し、容器にお寿司を詰めて担任の所に見せに来た。

この日の振り返りで、副担任とJ児がやりたい遊びを見つけて遊んでいたことを共有した。担任と対話しながら思いを引き出したり、折り紙が欲しい理由をあえて聞かずに見守ったりしたことが、J児のやりたい遊びを見つけることにつながったのではないかと振り返った。また、担任があえて質問しないで材料を渡したことが安心感につながったのではないかと振り返った。今後、お寿司を楽しくつくっていく姿を願って、保育室の出窓の所にいろいろなお寿司がつかれるように折り紙を用意したり、絵本を見やすい場所に置いたり、メニュー表を用意したりして環境を整えた。また、折り紙でのお寿司づくりが十分にできるように長机をJ児がこの日遊んでいいところの近くに置き、明日以降もJ児があそびの拠点を自分でつくっていけるようにしようと援助の方向性を共有した。

11月20日 あそびの時間

J児：「先生できたよ」

担任：「ありがとう。たくさんのお寿司ができたね」

K児：「Jちゃん、なんだかお寿司屋さんみたい」

J児：「お寿司屋さん？」

K児：「お寿司屋さんには、お寿司がいっぱいあるでしょ」

K児は、自分の遊びへと戻って行った。

J児：近くにあった長机を指さして、「この長机にお寿司並べたらどう？」

担任：「素敵なお寿司屋さんになりそう」

J児は、つくったお寿司を長机に並べた。

5歳クラスa児：「Jちゃん何つくっているの？」

J児：「・・・」

5歳クラスa児：「お寿司屋さん？」

J児：うなずく

5歳クラスa児：「これは何？」

J児：「たまごだよ」

5歳クラスa児：「おいしそうだね。」

担任：「a児さんは、何か好きなお寿司はある？」

5歳クラスa児：「サーモンかな」

J児：「サーモンもここにあるよ」 自分のつくったお寿司をニコニコしながら指をさした。

5歳クラスa児：「本当だね。これも、おいしそう」

担任：「他にもお寿司って何があるのかな？」

5歳クラスa児：「あつ、そうだ！ちょっと待ってて」

5歳クラスa児は、うみ組の部屋に戻って行った。

5歳クラスa児：「うみ組には、お寿司のネタが書いてある本があるんだよ。使う？」

J児：「うん」

5歳クラスa児：「マグロやイカ、海苔巻きもあるよ」

J児：「赤と緑の折り紙が欲しい」

担任：「どうぞ」

この日、J児は折り紙がある出窓を遊びの拠点にして、自らお寿司づくりをはじめた。担任は、自らお寿司づくりをはじめたJ児の姿を今日は少し離れた場所で見守ろうと考えた。J児は黙々とお寿司をつくり担任の所に持ってきた。K児は、J児のつくったたくさんのお寿司を見て、「お寿司屋さんみたい」と言った。J児は、K児の「お寿司屋さんみたい」という言葉を聞いて、保育室を見渡した。近くにあった長机を指さしてお寿司を並べたいと考え、近くにあった長机を準備した。しばらく、長机でお寿司をつくっていると、5歳クラスのa児が声をかけてきた。J児のつくったお寿司を見て何のお寿司なのかを質問をした。5歳クラスa児が声をかけてくれたことで、担任は、お寿司屋さん遊びがa児とのかかわりの中で広がるのではないかと考え、あえて5歳クラスa児に「他にもお寿司って何があるのかな？」と話しかけることにした。5歳

クラス a 児は突然何かを思い出したかのように「あっ、そうだ！」と言い、その場を去っていった。しばらくすると、5歳クラス a 児は、自分のクラスにあったお寿司屋さんの本（ネタの種類が書いてあるもの）を持ってきて、J 児に見せた。J 児は、その本をじっくり見ていた。そして、「赤や緑の折り紙が欲しい」と伝えてきた。マグロをつくったり、海苔巻きをつくったりしてお寿司屋さんのメニューが増えていった。

出窓の近くに折り紙を置く長机を用意したことが、J 児が自分で遊びをはじめるときかけにつながったのではないかと捉えた。担任は、お寿司屋さんになったらいいな、いろんな種類ができたらいいなと願いをもちながらも、J の遊びに寄り添い見守った。途中で、K 児が、「お寿司屋さんみたい」と J 児に話しかけてきたことや、5歳クラス a 児が興味をもって話しかけてきたことで、J 児の遊びがさらに広がった。担任が、5歳クラス a 児に「他にもお寿司って何があるのかな？」と声をかけることで、友達同士のかかわり合いが生まれ、J 児がやってみようと心を動かし、遊びを広げることができたのではないかと捉えた。この日以降も、J 児はこの遊びを続けていた。お寿司屋さんとしての楽しそうな雰囲気から友達が寄ってくるようになった。

11月25日 あそびの時間

J 児は、長机の上にお寿司のネタ（折り紙）、ティッシュ（ごはん）などお寿司屋さんをはじめられるように準備をしている。

L 児：「お寿司ください」

J 児：「何がいいですか」と言い、メニュー表を見せる。

L 児：「いくら」

J 児：「いくら？いくらって何？」

L 児：絵本やメニュー表を指さしながら「いくらはこちらだよ」

J 児：「いくらはありません」

L 児：「サーモンください」

J 児：「サーモンはあります。どうぞ」

J 児：「いくらってどれ？」担任に聞きに来る。

担任：「L ちゃん。いくらのお寿司ってどれだっけ？」

L 児：「これだよ」

J 児：「いくらつくる」

3歳クラス b 児：「お寿司ください」

J 児：「何がいいですか」

3歳クラス b 児：「たまごください」

J 児：「どうぞ。お金がいらしますよ」

3歳クラス b 児：「お金？」

J 児：「お金は、円いものだよ」

3歳クラス b 児は、自分のクラスに戻って円いものを探して持ってくる。

3歳クラス b 児：「これでいい？」

J 児：「これでいいですよ」

J 児：「ありがとうございます」

3歳クラス b 児：「これどうぞ」

担任：「これは何ですか」

3歳クラス b 児：「お寿司屋さんの看板です」

J 児：「看板つくってくれたの？」

J 児は、長机を出し、お寿司屋さんの準備をしていた。準備をしながら担任の方を見て、「今日お寿司屋さんするよ、来てね」ととても楽しそうな表情を浮かべていた。

お寿司をくださいとお客さんが来た。J 児は、お客さんの L 児にいくらを注文された。しかし、J 児はいくらを準備しておらず、L 児はサーモンに変更した。その後、J 児は、いくらはどうなお寿司か気になったようで、絵本を持って担任の所に来た。J 児、L 児と一緒に見ながらいくらのお寿司を探した。J 児の少し悲しげな表情から、いくらのお寿司もつくってみたいのではないかと読み取った。そこに、3歳クラス b 児がお店に来た。担任は、お寿司づくりに夢中になっている J 児が年下の子とかかわることでさらなる自信につながるのではと考え、遠くから様子を見守った。J 児は、お寿司屋さんになりきって「何がいいですか」、「お金をください」、「お金は、円いものだよ」などと生き生きと会話をしていた。

副担任との振り返りでは、J 児が友達や年少クラス児に対して自信をもって話して遊んでいる姿が話題になった。お寿司づくりを一人で十分に遊び、夢中になったことで、お寿司づくりへ自信をもつことができた。自信をもったことで、自分の知らないことを自分から担任に聞きに行こうという思いになったのだと捉えた。

夢中になることは、お寿司づくりへ自信をもつ姿、お寿司屋さんをやってみようとする姿、いくらを調べてつくろうとしたつくりだそうとする姿、3歳、5歳クラス児とかかわる姿などいろいろな姿につながっていくのではないかとJ児の姿から捉え直した。

考察

J児は、担任の近くにいて担任がしている遊びを見ていたり、一緒に遊んでいたりする姿が多くみられた。その様子から、J児には安心感が必要だと考えた。J児が安心して遊べるように、環境を整えながらJ児の気持ちに寄り添い、思いを読み取っていった。担任が近くにいなくても、自分だけでお寿司がつくれるように、J児と相談して材料を準備したり、お寿司のメニュー表や本などの視覚的にイメージが共有しやすいものの、遊びの拠点になる長机や出窓のスペースを活用したりしたことによってJ児が夢中になって遊ぶ姿が見られた。夢中になって遊ぶことで、J児は自信をもってお寿司づくりをしたり、かかわりの中でお店屋さんとしてお寿司を振る舞ったり、売ったりすることができた。お寿司屋さんでは、同じクラスの友達はもちろん、5歳、3歳クラスの友達とかかわる姿や他のお寿司をつくってみよう、やってみようとする姿にもつながったのではないかと捉えた。

「夢中になる」ということは、本園の共通認識（右図）でも他の実よりも少し大きい実で表されている。今回のJ児の姿から、遊びに夢中になることで、自然とかかわりが生まれたりやってみようとする気持ちになったりする。夢中になることが他の実にもよい影響を与えていく、つまり他の育ちを生む大切な姿だということを実感した。その姿を支えるために教師は、すぐに答えを出さずに寄り添うことが大切であると考えた。寄り添うことの大切さについては、今年度の研究取組の1つであるお出かけカンファレンスで大切だと気付かされたことでもある。保育をしていく中で、目の前の子どもに寄り添うこと、そして本園の共通認識に立ち戻って子どもたちの育ちに何が大切であるかを考え続けていくことが必要だということを捉え直した。



<4歳クラス Ⅷ期 1・2月> 年上へのあこがれの思いを大切に一輪車遊びを支える

これまでの保育の様子

4歳クラスのこの時期は、友達によさに気付き、認め合いながら遊んだり、年上の幼児の遊びを手本にし、教え合いながら遊んだりするなど、「友達とのかかわりを深める時期」である。3学期に入ると、降雪や気温が低い日が続き遊び場は屋外から屋内へと移行した。これまで屋外中心の遊びが屋内遊びへと移行していくため、遊戯室や保育室での遊びをどのように支えていくか副担任と話し合った。ロッカーの背面をL字に組み合わせて配置し、ブースのような空間や、ダイナミックに遊べるような広い空間をつくったり、絵本やテーブルを設置して遊びのきっかけになったりするように環境を工夫したところ、ロッカー背面のL字空間で、ごっこ遊びをしたりこまのバトル場をつくったりして遊ぶ様子が見られた。また、遊戯室では、年上の友達がしている一輪車や大縄の様子をまねして遊んでいる様子もあった。一人一人の遊びを支えるため、幼児がその遊びにどんな楽しみをもっているのかを読み取ったり、見守ったりしていこうと、保育の方向性を副担任と確認した。

M児は、遊戯室に一輪車が出たことに興味をもち遊んでいた。M児が一輪車遊びをしている場所には、5歳クラス（うみ組）の友達がたくさんいて、一緒に遊んでいた。M児は、うみ組の一輪車遊びをじっと見て、自分も同じことをやってみようとしている姿から、M児は年上への憧れの思いを抱いているのではないかと読み取った。副担任とは、M児が「一輪車に乗りたい」という目標に向かって粘り強く取り組んでいる様子やうみ組の一輪車のまねをしている様子から、M児が抱いている年上へのあこがれの思いを大切に、一輪車に夢中になれるように支えていこうと方向性を確認した。

1月19日 あそびの時間

遊戯室で一輪車遊びをしている。

M児：「うみ組さんのように一輪車に乗れない」

担任：「bちゃんやcちゃんが上手に乗っているもんね」

M児：「bちゃん、どうやって乗るの？」

5歳クラスb児：「壁にタイヤをくっつけて、片足をペダルにのせて、椅子に座るんだよ」

M児：「うん」

何度も練習する。

M児：「たくさん転んだから足が痛い」

担任：「そうだよね。dちゃんはどうだったのかな？」

M児：「ねえ。dちゃんはいっぱい転んだ？」

5歳クラスd児：「いっぱい転んだよ。がんばって練習したらここまで乗れるようになったよ」

M児：「そっか」

5歳クラスb児、c児、d児の練習している様子をじっと見て、まねをして繰り返し練習する。

M児：「ここまでのれるようになったよ。dちゃんがいるところまで乗れるようにがんばる」

5歳クラスd児：「一緒にがんばろう」

M児は、遊戯室に一輪車が出ると一輪車遊びを毎日していた。M児にとって、一輪車に乗る体験は今年がはじめてであった。M児は毎日のように練習していたが一輪車に乗ることができずに、担任に「うみ組さんのように乗れない」と言ってきた。M児は、担任が見守っている場で、練習をしていることが多かったが、担任に「うみ組さんのように乗れない」と言ってきた言葉から、年上へのあこがれの思いをもち、お手本にしているのではないかと読み取った。教師が「がんばって」と声をかけることもできたが、うみ組の友達からM児に乘れる方法を直接話してもらったり、乗れなかった時の気持ちを伝えてもらったりした方が、M児はさらに夢中になれるのではないかと考え、M児がうみ組の友達に自分でどうだったのか聞くことができるような声かけをした。すると、M児は、うみ組の友達に乗り方を聞きに行ったり、d児に練習をした時の気持ちを聞いたりした。うみ組の友達も今の自分と同じだった時があったということも励みになり、また練習を続けた。

副担任とは、うみ組とのかかわりを大切にしながら、担任、副担任も近くで見守りM児の粘り強く取り組んでいる様子を支えていこうと保育の方向性を確認した。そして、一輪車に乗れている年上へのあこがれの思いから、粘り強くチャレンジするという育ちにつながったのではないかと読み取った。

その後もM児は、あそびの時間をほぼすべて使って、毎日一輪車の練習をしていた。以前のように転んで痛いからくじけそうになるという姿はなく、転んでもすぐに起き上がり、すぐにチャレンジする姿があり、できるようになりたいという強い思いが行動や表情から読み取れた。繰り返し練習していると、遊戯室の端

から端まで乗れるようになった。初めて端まで乗れたときには、M児は、満面の笑顔であった。そして、周りにいたうみ組や担任から「おめでとう」という歓声があがった。

今後も、引き続き年上へのあこがれの思いが、M児の遊びの原動力となるように支えていこうと副担任と共有した。

2月20日 あそびの時間

M児：「先生、乗れるようになったよ」
担任：「わあー。すごい！乗れるようになったね」
M児：「次は、メリーゴーランドができるようになりたいんだ」
担任：「メリーゴーランド？」
M児：「bちゃんがやっているあれだよ」
担任：「そうなんだね。どうして、メリーゴーランドがやりたいの？」
M児：「だって、うみ組さんたちすごいでしょ。わたしも、できたらいいなって思ったんだあ」
担任：「うみ組さん、すごいもんね」
M児：「eちゃん。一緒にメリーゴーランド練習しよう」
5歳クラスe児：「うん」
M児：「eちゃんいくよ」
M児：「はあ、できなかった」
担任：「bちゃんたちのメリーゴーランドどうしてできるのかな？」
5歳クラスb児：「気持ちを合わせて、一緒にスタートするんだよ」
5歳クラスc児：「それにさ、2人とも手を広げて近づいていくの」
M児：「うん。分かった」
練習をして、できるようになる。

M児は、安定して乗れるようになるとうみ組がやっているメリーゴーランドができるようになりたいという思いをもった。担任は、どうしてメリーゴーランドがしたいのかM児に質問をした。すると、「うみ組さんすごいでしょ。わたしもできたらいいなと思ったんだあ」と話した。担任は、一輪車に乗れるようになり新たな目標ができたのだと捉えた。M児は、メリーゴーランドと一緒にしてくれるうみ組のe児と何度も練習をしていた。繰り返し練習するが、二人でメリーゴーランドを完成することはできなかった。担任は、メリーゴーランドができることを支えるために、近くでメリーゴーランドをしているうみ組の友達に聞こえるように、「どうしてできるのかな」と声をかけてみた。うみ組からのアドバイスを聞いていたM児は、うなずきながら真剣に聞いていた。

担任は、「うみ組さんたちすごいでしょ。わたしも、できたらいいなって思ったんだあ」の言葉からの年上へのあこがれの思いが、次の新しいやってみようにつながったのではないかと捉えた。そして、新しくやってみることができた背景には、頑張れば自分もできるという自信をもったからではないかと考えた。

その後、M児は、e児と向かい合った壁から同じタイミングでスタートできるように「いっせーの一で」と声をかけ合い、気持ちを合わせるようにして粘り強く何日も練習を重ね、とうとうできるようになった。メリーゴーランドができるようになったことで、またM児の自信につながったのではないかと捉えた。一輪車をしている場所には、3歳クラス（そら組）の友達も遊びに来るようになってきていた。M児がそら組の友達の様子をじっと見て、何か言いたそうにしている様子があった。そのため、今後M児がどのようにかわっていくのか見守っていこうと考えた。

2月25日 あそびの時間

3歳クラスc児：「どうやって乗るの？乗れないの」
M児：「cちゃん、一輪車に乗りたいの？」
3歳クラスc児：「うん」
M児：「タイヤを箱のここにくっつけるの」
3歳クラスc児：「うん」
M児：「そうそう。そしたら、箱をギュッとにぎって椅子にのるの」
3歳クラスc児：「うん。できない」
M児：「がんばって。大丈夫だよ」
3歳クラスc児：「できない」
M児：「はじめは難しいけど、いっぱい練習すればできるようになるよ。」

がんばって」

3歳クラスc児：「できた」

M児：「bちゃん、よかったね」

担任：「うみ組さんみたいだね」

M児は、にこっと笑っていた。

一輪車に乗っているM児の近くで、そら組c児が一輪車に乗ろうと練習をしていた。M児は、c児の「どうやって乗るの。乗れない」というひとり言を言っているc児の小さな声が気になり、M児は自分からc児に近づいて行った。M児は、c児に一輪車の乗り方を見せながら教えていた。c児が「できない」と言っているときにも、「大丈夫だよ」と優しく声をかけている姿があった。その姿は、まるで、M児がうみ組からしてもらったことをそら組にしているように感じられたため、担任はあこがれていた「うみ組さんみたいだね」と伝えた。すると、照れくさそうににこっと笑っていた。その表情は、うみ組のようになれたといううれしさからくるものではないかと捉えた。

M児が、一輪車に乗れるようになったり、メリーゴーランドができるようになったりしたことで、自信が高まり自分からかわっていく姿につながったと考える。また、M児が以前、うみ組に教えてもらったことをそのまま、そら組の友達に教えてあげたいという思いにつながったのではないかと考える。

考察

M児は、一輪車に乗りたいという目標をもっていた。一輪車に乗れるようになることは、すぐにできることではない。粘り強く練習を重ねることで少しずつ乗れるようになっていく。M児は、一輪車に乗れているうみ組の友達が多くにいたことで、「あんなふうに乗りたい。」という年上へのあこがれの思いを抱いたり、M児と同じように一輪車に乗る練習をしているうみ組の友達がいることが、M児の心の支えとなったりしたのではないかと考える。年上へのあこがれの思いをもつ姿は、粘り強く取り組む姿にもつながったのではないかと捉えた。また、一輪車に乗れるようになり自信がつくと、新しいことにやってみようという思いが生まれた。そして、その自信は、自分から他の友達とかかわっていく姿に変わっていった。

年上へのあこがれの思いをもつことは、一輪車に乗れるように練習する粘り強く取り組む姿、メリーゴーランドをやってみたいという新しいやってみようとする姿、一輪車の乗り方を伝えようとする自らかわっていく姿につながっていくのではないかと考えた。教師は、年上へのあこがれの思いを読み取ることが大切にしなが、援助や言葉かけのタイミングを図ったり、他の友達とつなげたりしながら支えることが大切であると考える。また、本園の遊びの時間は異年齢の子ども同士が同じ空間で遊ぶことができ、年上へのあこがれの思いをもつことができる環境にある。あこがれの思いをもつことは、やってみようとする姿につながり、やってみようとする姿は、次のクラスにも伝わっていき、遊びを伝承したり、ひいては園の文化をつくったりしていくことにつながっていくのではないかと考えた。

<5歳クラス Ⅸ期 5月> 「夢中になる」ことを問い直し、遊びを支える

これまでの保育の様子

4月、5歳クラスとしての新たなくらしがスタートした。昨年度までに自分が好きだった遊びを思い出しながら、生き物探しや泥遊び、料理づくりの遊びを楽しんでいる様子が見られた。現在の5歳クラスの幼児が、4歳クラスだった頃（昨年度）の遊びを思い返してみると、1つの遊びを長く続けている幼児が多かった印象を受けていた。しかし、環境が変わったためか、多くの幼児が一つの遊びを長く続けるのではなく、遊びを始めても、すぐに遊びが終わってしまう様子が見られた。特にトラブル等があったわけではないのだが、友達がしている遊びに入ってはすぐにやめて、また次の遊びも数分のうちに終わるということもあった。このような遊びの様子を見て、今後どう支えていくのがよいか、副担任と毎日のように話し合っていた。まずは、遊びが続く姿を願って、料理遊びに使う器具の種類を増やしてみたり、テラスが屋内からでも屋外からでも使えるように地面にマットを敷いたりして環境構成をしてみようと共有した。

副担任と日々の振り返りを重ねる中で行き着いたのは、やはり一人一人の楽しみを読み取ることの大切さであった。幼児が何に楽しみを見いだしているのか、なぜ楽しみを見いだせずにいるのか、どんな経験があって今の姿につながっているのか、クラスの幼児一人一人について丁寧に読み取っていきこうと、今後の保育の方向性を確認した。

5月の初めには、一人一人の幼児の思いの読み取りを、さらに深めていきたいという願いをもった。そこで、担任と副担任で連携しながら読み取り、降園後に密に共有することにした。しばらくの間、担任は全ての幼児の読み取りをしながらも、特に「今日はこの子」と決めて、幼児の遊びの姿を追いながらその子の楽しみを見つけていくこと、そして、副担任は広い視野をもって幼児の遊びを読み取っていくことを決めた。

5月8日 あそびの時間

A児：「ここに水をちょっと入れると粘土ができるよ」
B児：「分かった。僕、水を持ってくるね」
A児：「そんなに入れちゃだめだよ」
B児：「でもちょっと入れたよ。これじゃ足りないから、もっと入れよう」
A児：「そんなに入れなくていいんだよ」
B児：「お水いっぱいの方が絶対いいと思う」
A児：「これじゃあ、ドーナツできないじゃん。あーあ、僕もうやめる」
教師：「え、こんなにがんばって集めたのに、やめるの？」
A児：「だってさ、こんなに水浸しになっちゃったんだもの」
教師：「本当だね、何とかする方法はないかねえ」
A児：「じゃあさ、水をこぼせばいいかなあ。こうして」 ワゴンを傾ける
教師：「ああ、本当だ、水がなくなった」
A児：「でも、もうやめる」

この日は、担任はA児の楽しみを深く読み取りたいという思いをもち、全体の保育の様子を見ながら、A児の姿を追っていた。A児はB児と一緒に園舎裏に行き、粘土質の土を集めていた。二人の会話からドーナツをつくりたいという目的を共有して遊んでいる様子を読み取れた。教師は、粘土質の土に混ぜる水の量について、A児とB児が思い描いている量が違うことに気付いた。しかし、かかわりの中で一緒に水の量を考えたり試したりしていくことが二人の育ちにつながるのではないかと考え、あえて二人の様子を見守ることにした。思い通りの水の量にならなかったためか、A児は「僕もうやめる」と言って、遊びをやめようとした。A児が長時間かけて土を集めていたため、担任は、遊びが続くような方法を一緒に考えて援助をしたが、結局、「でも、もうやめる」と言って、グラウンドの方に走っていった。担任は、A児は夢中になってドーナツづくりをしていたのではないかと読み取っていたため、A児が「やめる」と言ったことで、そこまで遊びに夢中になっていなかったのではないかと考えてきて、戸惑いを感じていた。

担任は、この日の副担任との振り返りの中で、A児の遊びの様子を話題にした。A児が粘土質の土でのドーナツづくりをやめてから、自転車に乗っていたことを副担任との話合いの中で知った。しかも、この数日前に補助輪なしの自転車に乗ることができるようになり、満面の笑顔で自転車に乗っていたということも初めて知った。

この時、担任は過去の交流での学びを思い出していた。それは、県外の園と交流をした時に聞いた「遊びが継続することだけが、遊びに夢中になることではない」という言葉である。担任は、A児がドーナツづくりをやめたとき、そこまで夢中になっていなかったからやめたのではないか、もし夢中になっているなら、他の遊びをしないのではないかと考えていた。しかし、A児は自転車の遊びに夢中になっていて、「遊びに夢中になる姿」は、一つだけではなく二つ、三つの遊びを同時に楽しむ姿であってもよいのではないかと捉え直した。A児の遊びが変わったとしても、肯定的に捉え、A児の「今」の楽しみを支えたいと思い新たにした。

しかしながら、一つの遊びが続かなくても、次の遊びをただ支えればいいというわけではない。どのくらい夢中になっているかをさらに丁寧に読み取ることで、続ける方向性で援助するのか、新たな遊びを支えるのかを判断していこうと考えた。その際には、A児のその時の表情をよく見る、会話に耳を傾ける、過去の経験を想起する、A児の目線で見ると、動線をたどってみる、時間の経過をみるなど、多様な視点からの読み取りによって、夢中になっているかを判断しようと思い、新たな視点にした。

5月12日 あそびの時間

A児：「ねえ、Cくん、僕の粘土は使わないでくれる？」
C児：「いいじゃん、いっぱいあるんだから」
A児：「違うんだよ、これを使って、もっと大きなドーナツにするんだ。手伝って」
B児：「うん、いいよ」
教師：「え、これより大きくなるの？おもしろそう！どうやってつくるの？」
A児：「簡単だよ。土をぐるっと足していくんだよ」
B児：「どこに入れるの？」
A児：「ここだよ」
C児：「ここ？」
A児：「違うよ。ここは入れない」
教師：「ねえAくん、ぐるっと足すって、どういうこと？」
A児：「ほら、周りだけ入れるってことだよ。こうやって。真ん中では入れないの」
B児：「ああ、そういうことか」
C児：「特大の、でかビッグドーナツになるね」
20分程度経ち、お片付けの時間になる。
教師：「うみぐみさーん、おーかたーづけー」
A児：「今日はこれで終わりでーす」
B児：「え、もうちょっとやりたいよ」
A児：「でも、僕はもうやめる。もう今日はやりきったからいい。やめる」
教師：「そうなんだね。また明日も楽しみだね」
A児：「明日はもっとでかくする。先生、明日も来てね」

この日A児は、これまでよりも大きなドーナツをつくろうという思いをもち、B児、C児と一緒に園舎裏に足を運んだ。教師は、A児がどのくらい遊びに夢中になっているのかを読み取りながら、遊びを見守っていた。途中、A児のイメージがB児やC児にも伝わることを願って、『「ぐるっと足す」ってどういうこと？』とA児に問うてみた。A児が別の言葉でB児、C児に説明したことで、イメージが共有され、三人での遊びが20分程度続いていた。

教師が片付けの時間になったことを知らせた。すると、A児がB児に「今日はこれで終わりでーす」と伝えた。その時、A児はもしかしたらあまり夢中になっていなかったからすぐに終わりにしようとしたのではないかと読み取った。しかしながら、その読み取りは違っているのではないかとすぐに捉え直した。それは、「もう今日はやりきったからいい」とA児が続けて言ったからである。この言葉から、A児がもう今日はやらなくてもいいくらいの満足感や充実感をもっているのではないかとということが伝わってきた。

副担任との振り返りでは、この日のA児は、遊びに夢中になっていた姿と捉えてよいのではないかと共有した。いつもと同じように遊んでいるように見えたが、「やりきった」という満足感や充実感が伝わるような言葉を口にしていただけである。

そして、この日のA児の姿を見ていて気付いたことは、遊びに夢中になることで満足感や充実感が生まれ、ひいてはそれが、気持ちに折り合いをつける姿にもつながるのではないかとということである。一昨年度、研究協力園との交流の中で、「保育について語り合っていると、どんな話題であっても最終的に、子どもが遊びに夢中になっているか、ということに行き着く」と、他園の職員が語っていたことを思い出した。この日のA児の姿を見ると、遊びに夢中になることが、気持ちに折り合いをつけるという育ちにつながっている。他園の職員が語ったこの言葉が、さらに実感を伴う言葉に変わったように感じた。そして、遊びに夢中になるということについての捉えが広がったのではないかと自覚した。

担任は、A児が夢中になる姿をさらに支えたいという願いをもち、粘土質の土での遊びの枠や幅が広がるような環境をつくっていこうと、副担任と共有した。そこで、みんなの時間を活用し、昨年度の同じ時期の5歳クラスの土を使った遊びが記録された写真を見る機会を設定することにした。園庭の土を種類ごとに集める遊び、粘土質の土でお皿やマスコットをつくる遊びの写真を見ることによって、A児が遊びに夢中になる姿を支えていきたいと考えた。

3歳クラスa児：「わたし、シナモンがいい」
教育補佐員：「うみ組（5歳クラス）さん、aちゃんが何か欲しいものがあるみたいですよ」
D児：「aちゃん、何がほしいの？言ってみて」
3歳クラスa児：「シナモン」
担任：「何？シナモンって？」
教育補佐員「何かのキャラクターのことかなあ。何かつくってほしいみたいですよ」
A児：「僕がつくってあげようか？でも、シナモンって、どんなのだろう」
教育補佐員：「うーん、何かかわいい感じだったような」
担任：「もしかして、あれのこと？」 E児が着ていたTシャツを指さす。
A児：「Eちゃん、ちょっと来てくれる？ねえ、aちゃん、これのこと」
3歳クラスa児：「うん」
A児：「分かった。ちょっと待ってて」
担任：「Aくん、優しいね。もしつくるのに必要なものがあったら言ってね」
A児：「先生、何も要らないよ。これで作るからさ」
担任：「ああ、なるほど。せっかく集めた粘土、いいの？」
A児：「いいんだよ。僕はうみ組（5歳クラス）だからね」
担任：「Aくん、さすがだね」
F児：「ねえ、僕もそれやりたい」
A児：「いいよ、一緒にやろう」

この日、3歳クラスa児が教育補佐員とともに5歳クラスのテラスに来ていた。日頃から、3歳クラスの幼児についてもカンファレンスなどで遊びの様子を共有していたため、5歳クラスの幼児に何かお願いがあつてきたのだろうということが読み取れた。a児はキャラクターをつくってほしいという願いを補佐員とともに5歳クラスの幼児に伝えた。ちょうどそのキャラクターがプリントされていたTシャツを着ていたE児が近くにいたため、みんなでイメージが共有できるようにしたいと願い、視覚的に援助をすることにした。A児にもそのイメージが伝わったことで、a児のためにキャラクターのマスコットをつくる遊びが始まった。担任は、A児の優しさに心を動かされながらも、画用紙やビニルテープ、布テープやペンなどを使ってつくることをすぐさま想定し、「必要なものがあったら言ってね」と声をかけた。粘土質の土でつくることをA児から聞いたときは、担任はとても驚いた。これまで、自分が集めた粘土質の土は、誰に頼まれても、あげることはなかったからである。もしかしたら、過去の遊びの写真を見たことが想起され、粘土質の土でマスコットをつくることにつながったのかもしれないと、みんなの時間にクラス全員で共有した写真を思い返していた。さらに、A児は5歳クラスとしての自覚があつたのではないかということにも大きく心を動かされた。

副担任との振り返りでは、粘土質の土の遊びに夢中になってきたからこそそのA児の育ちの姿と、その姿が見られた感動を共有した。遊びに夢中になることで生まれた満足感や充実感は、5歳クラスとしての自覚にもつながっているのではないかと話し合った。A児は5月12日以来、粘土質の土の遊びはしていなかったが、この日もA児は遊びに夢中になっていたのではないかと捉えた。長期的にA児の遊びを捉えていくことの大切さを副担任と共有した。そして、遊びに夢中になることは、やはり大きな育ちの基礎になるのだと確信に近いような思いをもった。

その後A児は、粘土質の土を固め、それを削って目の細かな土を集めて楽しむ遊びを続けていた。この遊びも毎日継続していたというわけではないが、A児の生き生きとした表情や、大切そうに土を集める動作から、夢中になっている姿ではないかと副担任と共有した。長期的な視点でみてきたからこそ、点と点がつながり、A児の遊びに夢中になる姿を捉えていくことができたのではないかと振り返っている。

考察

本事例でのA児は、4月当初から、「やめた」と言って急に遊びをやめて違う遊びを始めることがあつた。しかし、それは決して夢中になっていないわけではなかったのではないかと振り返った。A児の姿から、遊びが毎日継続することだけが夢中になるとは限らないし、夢中になれる遊びは一つだけとも限らないのではないかと考えた。そのため、長期的に子どもの遊びを読み取っていくことが大切であると捉え直した。遊びに夢中になることによって、A児が達成感や充実感をもつ姿を目の当たりにした。そして、その充実感や達成感が、気持ちに折り合いをつける姿や、5歳クラスとしての自覚をもつ姿にもつながっている。遊びに夢中になることが、育ちの基礎になるのではないかと考えた。

しかしながら教師は、どのくらい夢中になっているのかをしっかりと読み取り、続ける方向で支えるのか、新たな遊びを支えるのか、判断することが大切であると考えた。うまくいかないからあきらめるという場合には、励ます、新たな道具を出す、かわりの中ですくうようにするなど、遊びを続けられるように支える時もある。あきらめることが次の新たな発想につながる場合には、いっそあきらめることを提案するもの

大切かもしれない。これは、文脈に依存されると言われる保育の難しさである。そのため、保育者は子どもたちの育ちについて考え続けることが大切である。また、今回のように副担任との連携の中で、一人一人の遊びを読み取っていくことも大切なのではないかと考えた。

A児の姿を読み取っていく中で、夢中になるということを「遊びが継続する」とばかり思い込んでいた自分の姿を自覚した。普段、気にもすることがなかったことを問い直し、自分の思考の枠を広げることができたのは、交流での学びがあったからこそであると思っている。本研究期の「つながる保育」の大きな意義であると感じた。

<5歳クラス X期 7月> 環境構成を問い直し、遊びを支える

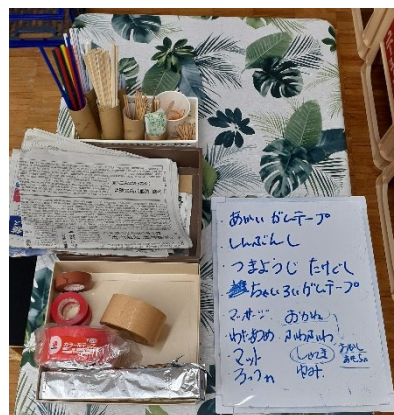
これまでの保育の様子

7月に入り、気温が高くなってきた。屋外ではペットボトルロケットや雨どい遊びなど水を使った遊びをする子、園舎裏の木陰で生き物を捕まえて遊ぶ子など、暑い中でも涼を感じながら遊びを楽しむ様子が見られるようになった。担任は、子どもたちの遊びの様子を読み取りながら、テラスにパラソルを置いたり、屋内の製作コーナーの廃材を増やしたりして、暑さをしのぎながら自分のやりたいことができるような環境を整えることに日々努めていた。

7月8日の午後の遊びの時間、G児とH児が、テラスでたらいに水をため、そこにプラスチックのボールを浮かべていた。担任は、二人が何をしたいのか読み取りたいという思いをもち、その様子を少し離れたところから見守っていた。二人はテラスから一度保育室に戻り、ガムテープの芯、ストロー、和紙をテラスに持ち出した。ガムテープの芯に和紙を貼り付け、ストローで取っ手を付けると、「ボールすくいだよー」と言って、たらいの中に入れていた。しばらく見てみると、和紙が水でふやけて破れてしまった。二人はこれをとてもしんでいるように見えた。担任は、もしかしたら二人は、お祭りの金魚すくいをイメージし、すくえるか、すくえないかのスリルのような感じを楽しんでいるのではないかと読み取った。この後、近くにいた友達も遊びに参加し、ボールすくいを楽しむ様子が見られた。

遊びの時間が終わり、担任が帰りの集まりの準備をしていると、G児が担任のところに来て、「みんなに話したいことがあるから時間をください」と言った。担任はその思いを受け、帰りの集まりでG児が話す時間を設定した。G児は、「みんなで、おまつりがしたい」と伝えていた。クラスの子どもたちは、「いいね、じゃあ私はりんごあめをつくりたい」「ぼくはわたあめ」など、自分の思いを話していた。担任は、出てきたアイデアを「いいね」「おもしろそう」と受け入れながら、「先生が準備したほうがいいものはある？」と問うた。すると、子どもたちは、「割り箸と赤いガムテープがほしい」などと、自分の必要な物を次々に挙げていった。

担任は、副担任と相談しながら、G児の発想から遊びが広がってほしいと願い、この日の帰りの集まりで子どもたちがほしいと言ったものをホワイトボードに書きだし、テーブルの上に準備した。たくさんの子たちが遊びにかかわることを思い描き、一つ一つの素材を多めに準備しておくことにした。



7月9日 あそびの時間

G児：「Hちゃん、今日はこれでりんごあめつくって、おまつりしよう」

H児：「うん、いいよ」

I児：「私も入一れーて」

J児：「私も」

G児：「いいよ。Iちゃんたちは何がつくりたい？」

I児：「私はね、わたあめ！」

G児：「じゃあつくったら集めてお店にしよう」

I児：「楽しみだなあ、お祭り」

G児：「ねえ、Kくん、その赤いガムテープ返して。割り箸とゴムも。これはりんごあめで使うんだよ。先生がりんごあめのために準備したんだよ」

H児：「そうだよ、これはお祭りのやつなんだよ」

K児：「でもさ、これはみんなのものじゃん！」

G児：「そうだけどさ、ここにもおまつりの道具が書いてあるでしょ」 ホワイトボードを指さす。

K児：「でも僕が先に使っていたから、終わったら貸すから」

担任：「Gちゃん、どうしようか。先生も一緒にKくんに話そうか？」

G児：「うーん、じゃあ、こっちのテープでもいいや」

担任：「本当にいい？先生も一緒にKくんに話そうか？」

G児：「こっちでもいいよ。つくれるから」

G児とH児はこの日、朝からりんごあめをつくり始めた。I児やJ児もお祭りの仲間に入り、一緒にお祭りの準備を進めていた。担任は、この様子を少し離れたところから見守っていた。すると、K児がおもむろにG児たちが囲んでいたテーブルに置いてあった割り箸やガムテープを別のテーブルに持っていった。G児は、すかさず「赤いガムテープ返して」とK児に言った。K児は「みんなのもの」だと言い返し、G児と言ひ合いになっていた。

G児とK児のやりとりを見ていた担任は、二人をどう支えようか迷っていた。この日準備されている赤い

ガムテープはりんごあめのための赤いガムテープだと思うG児も、みんなが自由に使えるものだと思っているK児も、どちらにも共感できるからである。言い合いの末、G児がガムテープではなく、ビニルテープを使うことで気持ちに折り合いをつけた。担任は、G児が納得しているかどうかを確かめるために、「本当にいいの？」と念押しした。G児は穏やかな表情で赤いビニルテープを手に取り、りんごあめをつくり始めたところから、気持ちに折り合いがついていることが読み取れた。

G児が赤いビニルテープを代用することで、気持ちに折り合いをつけていた姿に育ちを感じながらも、担任は自分の環境構成を振り返っていた。素材がいつもとは違う場所に置かれていたこと、その素材の用途が書かれたホワイトボードも近くに置いてあったことによって、「ここにある道具はお祭りのみに使うもの」という暗黙のメッセージを与えていたのかもしれないと問い直した。K児のように、他のことにその素材を使いたい子も中にはいるだろうし、素材を見て、さらにお祭りに使う道具を発想していくことにつながるかもしれない。このような考えが頭の中を巡り、多くの子どもたちにとって、いわば「お祭りの遊びを強いるような環境」をつくってしまったのではないかと思ったのである。

副担任との振り返りでも、「今日の環境構成はやりすぎであったか」という話題になった。副担任は、この日の環境構成は、子どもが必要なものを自分たちで考え、教師がそれを準備したため、教師と子どもで一緒につくった環境だからよかったのではないかと、そして、今日その遊びをしようと決めたのは子どもであると、肯定的に捉えていた。とても共感できる考えで、環境構成への見方がまたさらに広がったように思えた。

振り返りタイムを終えた後、担任は、子どもと教師と一緒に環境をつくっていくこと、一つの遊びのみに誘われるような限定的な環境というよりは、遊びが子どもの発想で発展する余地があるような環境をつくっていくことを意識してみようと思いを新たにした。

この日から数日間は、お祭りに使いたいものを製作することが遊びの時間の中心になった。7月14日の帰りの集まりでは、G児は、お祭りを他のクラスに知らせる看板をつくりたいという思いをみんなに話していた。そこで、G児がどのような看板をイメージしてもその願いが叶うよう、コルクボード、ホワイトボード、大きな紙などを準備し、環境を整えた。

7月15日 あそびの時間

H児：「私、これがいい！大きな看板ができる」

担任：「わあ、すごいねえ。遠くからでもよく見えそうだね」

G児：「私は、これがいい」 A4サイズのコピー用紙を手取る。

I児：「これ、小さくない？」

G児：「でも、これにする」

J児：「えー、小さいよ」

担任：「Gちゃんは、これがいいんだね。どうしてこれがいいの？」

G児：「だってさ、これの方が書きやすいし、いっぱいつくりたいからさ。やまさん（4歳クラス）と、らさん（3歳クラス）と、あとは、遊戯室とか、多目的室とかに貼ったりしたいから」

I児：「いっぱいある看板なんだね」

J児：「私も一緒に書くね」

この日、朝の支度を終えたG児、H児、I児、J児は、保育室の隅に置いてあった大きな紙などを見て、一緒に看板をつくろうと盛り上がっていた。H児が大きな紙を手に取り大きな紙に書こうとしていたが、G児は、いつも保育室に置いてあるA4サイズのコピー用紙を手を取った。担任は四人の遊びの様子を見守っていたのだが、G児がどうしてA4サイズのコピー用紙を選択したのか、その思いを知りたくなり、G児にその理由を聞くことにした。するとG児は看板をいろいろなクラスや部屋に貼りたいという思いをもっていたことが分かった。

副担任との振り返りの中で、環境構成をしても、それは教師の意図通りにいくとは限らないということが話題になった。それは、子どもたちが無限大の発想力をもった存在だからである。だからこそ、意図をもって環境構成をするのだが、その意図や想定を超えてくることを前提にして、一緒に遊びの環境をつくっていくことが大切なのではないかと話し合った。これまでに担任は、環境構成をして、教師の意図通りに遊んだ日を、何となく「子どもの思いを読み取れた日」「環境構成が成功した日」と捉えていたように思った。それも大切なかもしれないが、教師の意図を超えていくことを前提にして子どもの思いを読み取り続けること、豊かな遊びにしていくために新たな環境を一緒に作りだしていくことに、環境構成の本質があるのではないかと捉え直した。

G児は、看板をつくった後、友達と一緒に太鼓づくりを始めた。お祭りのときに、遊戯室に大勢の幼児が集まったら、太鼓を叩きたいという思いがG児との会話の中で読み取れた。以前、G児は音楽に合わせて太鼓を叩いて楽しんでいったことがあったため、担任は、自由に音楽をかけられる環境をつくることで、G児の思いを支えたいと考えた。そこで、CDデッキを遊戯室に移動し、音楽を自分たちでかけられるように環境構成を行った。また、お祭りの雰囲気合いそうなCDや曲を予め準備し、すぐにG児の思いに添えるように

した。

7月16日 遊びの時間

G児：「ねえ、次は、この曲にしよう」
曲に合わせて、太鼓をたたく。
G児：「そらさん（3歳クラス）も、やまさん（4歳クラス）もいっばいきたね」
J児：「太鼓を聞きたい人はこっちですよー。座ってください」
G児：「ねえ、みんな。何の曲がいい？」
担任：「aくん、どうしたい？」
4歳クラスa児：「いつもうみさん（5歳クラス）が踊ってるやつ」
G児：「ああ、“サママ”ね、オッケー」
J児：「Kくん、曲流せる？」
K児：「オッケー」
曲に合わせて、太鼓をたたく。
担任：「bちゃん、楽しいね。次何の曲がいい？」
3歳クラスb児：「またおんなじのがいい」
担任：「分かる、これいいよね。お姉さん達に伝えてみる？」
3歳クラスb児：「うん」
G児：「bちゃん、聞きたい曲ある？」
3歳クラスb児：「うん、おんなじのがいい」
G児：「わかったよ。じゃあもう一回やるね」

G児たちはこの日、太鼓を遊戯室に運び、その前にイスを10脚程度並べて太鼓のショーのような遊びを始めていた。遊戯室は幼稚園の中央にあるため、曲を流すと、どのクラスにも音が聞こえてくる。1曲演奏し終わる頃には、どのクラスの幼児も楽しい雰囲気を感じて集まってきた。担任はG児たちが準備したいイスに座り、ショーの客として遊びに参加していた。

G児は、準備してあったCDプレイヤーを操作し、自分の好きな音楽を流して、太鼓演奏を始めた。多様な曲が準備してあったためか、自分の好きな曲が終わると、今度はイスに座っていた年下の子たちに「何の曲がいい？」と尋ねていた。腰を落とし、年下の幼児と視線が揃うようにして話す姿に心を動かされた。担任は、4歳クラスa児が自分の思いを話しやすいようにしたいという思いをもち、そっと「どうしたい？」と尋ねた。4歳クラスa児は、普段から幼児が遊びの中で踊っている曲をリクエストした。次いで、3歳クラスb児もリクエストをするなど、遊びを通して、自然と異年齢でかかわる姿が見られた。

この日の振り返りの中では、G児が夢中になれる環境をつくっていったことで、異年齢のかかわりが生まれたのだろうと話し合った。G児を中心に、子どもたちが興味をもつであろう音楽を揃えておく環境づくりは、そんなに簡単にできるものではなかったが、幼児教育が「環境を通して行う教育」と言われるように、環境づくりに力を注ぐことは、子どもたちの遊びにとって大きな意味があることを改めて実感した。担任にとって、G児のこれまでの遊びの経験や、保護者から聞いた家庭での様子などを想起しながら曲を選択していく時間も、G児を支えるための大切な時間、楽しい時間であったと捉えている。保育者も楽しんで保育をするためには、子どもの姿の読み取りのもと、環境づくりに力を注ぐことが重要なことのひとつであると考えた。

考察

G児の思いを読み取り、支えていく中で、自身の環境構成について何度も問い直した。お祭りの遊びを強いるような環境をつくっていたのではないか、でも、子どもの思いを聞きながらつくった環境だったのではないか、最終的に遊びを選んだのは子どもだからその環境でよかったのではないか、新たな遊びや発想を生む余地のある環境が大切なのではないか、そして、環境構成の根源にもやはり子どもたちの確かな読み取りが大切なのではないか…。多様な見方で「環境構成」ということを捉え直す機会となった。

環境構成において大切なのは、「教師が願いを込めた環境は、子どもは無限大の発想によって教師の意図を超えた新たな環境になる」「子どもの思いを読み取り続け、一緒に環境をつくっていく」ということなのではないかと考えた。教師の意図通りにいく環境構成のみがよいのではないと捉え直した。教師は、子どもは教師の意図を超えていくことを前提にし、子どもの思いを読み取り続けることで、新たな環境を一緒に作りだしていくことが大切であると捉えた。日々の保育を子どもたちと一緒に楽しむためにも、環境構成が最も重要な要素の一つであることも改めて確認する機会となった。

G児の姿をもとに環境構成について考えてきたのだが、前の段落で述べたような環境構成がもつ意味や価値について、なかなか言語化できずに悩んでいた。そのようなとき、以前に交流した園で、「保育の環境をどうつくっていくか」ということを話題にカンファレンスをしたことを思い出した。その園の先生ならどう考えるのか知りたい、という思いをもち、悩みを相談してみることにした。わずかな時間ではあったが、一緒に

悩み、考える時間をもてたことで、自分なりの言葉を紡ぎ、エピソードとして綴ることができたのではないかと考えている。保育について共に考えられる仲間がいることは、「つながる保育」の大きな意義の一つであると改めて感じた。

<5歳クラス XI期 12月> 1年生へのあこがれの思いを原動力に、夢中になる姿を支える

これまでの保育の様子

11月の下旬から、気温が低くなり、子どもたちの遊びの拠点が、園庭から室内へと移っていった。担任は、廃材の量をこれまでよりも増やしたり、こまやビー玉などの本園では冬に子どもたちが使うことが多い遊具を新たに出したりして、環境を整えてきた。

12月5日、小学校との交流会では、一緒に踊る、おにごっこをする、小学生が飼育しているアルパカとかかわるという活動を一緒に行った。踊りをする時には、1年生が「一緒に踊ろう」と声をかけてくれたのだが、1年生の踊りを見ている子が多かった。しかし、うみ組の子どもたちは、元気いっぱい楽しくダンスを踊る姿を目の当たりにし、一瞬たりとも目を離さないようにしようとしている姿が読み取れた。L児は、リズムに乗って体を揺らしながら、踊りをまねるように手を少し動かしていた。そして、ダンスが終わった後には、「私もできるかなあ」とつぶやいていた。もしかしたら、L児は『スーパースター』のダンスを踊りたいのではないかと担任は読み取った。

そこで担任は、L児が幼稚園の遊びの中で、小学生にあこがれをもちながら『スーパースター』のダンスを楽しむ姿を思い描き、音源と曲の振り付けに使うタオルを準備し、いつでも使えるように環境構成を行った。

12月8日 あそびの時間

L児：「ねえ、小学校のダンスしよう」

O児：「いいね。やろう、やろう」

N児：「私もいーれーて」

L児：「先生、『スーパースター』ある？」

担任：「1年生が踊っていた曲だよね？」

L児：「そう、私もやりたいの」

担任：「ちょっと待ってね。すぐに準備するね」

L児：「ありがとう」

『スーパースター』の曲の準備ができ、L児が曲をかける。

L児：「じゃあ円くなって。私のまねをして。まずは、こうやって手を上げて。手を下す時に「ヘイ！」っていうんだよ。じゃあやってみよう」

O児：「え、ここからどうするんだっけ？」

L児：「多分こうだったと思う。こっちに動いて、手は、こうだったと思う」

M児：「分かった。ありがとう」

L児：「タオルがあるといいんだけどなあ」

担任：「どんなタオルがいいの？」

L児：「このくらいの長さの」

担任：「ちょっと待ってて。このくらいの長さね。これなら何枚かあるけど、使えそう？」

L児：「あ、これでちょうどいい。ありがとう」

N児：「ねえ、もう一回やらない？」

L児：「いいね。やろう、やろう。じゃあさっきの位置について」

週末をはさみ、翌週の遊びの時間、L児は朝登園するやいなや、「ねえ、小学校のダンスをしよう」とM児に声をかけていた。やはり小学校の交流会での経験が、踊りたいという思いにつながったのではないかと読み取りながら、担任はL児の遊びを見守っていた。曲をかけ、踊っている途中、M児が「え、ここからどうするんだっけ？」とL児に聞いた。L児は迷いながらも「多分こうだったと思う」とM児に伝えた。担任はこの時、交流会で1年生がしていたダンスの動きと少し違うことに気付いた。担任はこの時、「1年生はこうしていたような」と言いながらそれとなく振り付けを伝えることもできたのだが、子どもたちがかわりの中で振り付けをつくっていく方がよいのではないかと判断し、見守ることにした。この日、L児たちは踊りに夢中になり、何度も繰り返して練習をしていた。

副担任との「10分振り返り」の時間には、『スーパースター』の踊りの遊びを支える援助や環境構成について振り返りながら、L児の1年生へのあこがれの気持ちが高まっていることについて話し合った。音源や踊りで使うタオルが準備されていたことで、L児が夢中になって遊ぶ姿につながっていたのではないかと、また、担任が見守る姿勢を大切にすることで、かわりの中で踊りの振り付けをつくり出していく姿につながったのではないかと振り返った。L児がこの日の遊びの時間、友達とかかわりながら夢中になって遊んでいた原動力は、一つ年上である1年生へのあこがれの思いではないかと共有した。1年生との交流は、普段の遊びやくらしと切り離された特別な活動としてではなく、L児のように遊びにつながる大切な時間として捉えていくことが大切であると、改めて確認した。そのために、教師は、交流で何に心を動かしたのかを確かに捉え、支えていくことが大切なのではないかと考えた。

この日から数日、L児の『スーパースター』の踊りの遊びは続いた。12月11日の遊びの時間、L児は担任のところに来て「先生、みんなでダンスをしたいから、「みんなの時間」を使ってもいいですか」と話した。その日、担任は季節の製作をしようと考え、準備を整えていたため、活動を変更するべきか迷った。しかし、この時、ふと他園に参観に行ったときに書いた交流だよりに、「育ちへの願いに立ち返って、活動を変更するかどうかを見極めることの大切さ」について書いたことを思い出した。言うまでもなく、製作をする時にも一人一人の子どもたちへの願いはあったが、今、本当に支えるべきは、L児の1年生へのあこがれの気持ちなのではないかと考えた。

そこで、この日の「みんなの時間」は、前半にL児の『スーパースター』の踊りをする時間、後半に製作をする時間に急遽変更することとした。

12月11日 みんなの時間

L児：「みんなで、『スーパースター』のダンスをやりたい」
O児：「いいね。私もできるから、今度はみんなでやりたい」
O児：「え、僕分らないんだけど」
L児：「大丈夫。私が覚えているから、今からみんなに教えるね。
みんな立って。まずはこうやって手を上げて…」
L児がダンスの仕方を説明する。
O児：「やっぱり、僕はやらない」
担任：「そうか、Oくんは、どうしてやりたくないのかお話できる？」
O児：「だって、難しくてできないかもしれないから」
M児：「だったら、練習すればいいんだよ。何回もやってみようよ」
O児：「えー」
L児：「やりたくない人は、見ていてもいいんだけどさ。大丈夫だよ、私が教えるからさ」
O児：「うーん、やろうかな」
M児：「大丈夫だよ、Oくん。私も教えるから」
担任：「Lちゃんは、みんなでこのダンスができるようになって、その後はどうしたいの？」
L児：「次に小学校に行くときに、小学生と一緒に踊りたいの」
担任：「ああ、そういう思いがあるから、みんなでやりたかったんだね。Oくんが自分の思いをしっかりと言えたこともすごいことだと思うよ」
L児：「私も、Oくんはすごいと思う」
O児：「まあ、できるか分からないけど、とりあえずやってみる。できなかったら、見ているね」
担任：「Oくん、本当にそれでいいの？」
O児：「うん、やってみる」
L児：「じゃあ、みんなでやってみよう」

「みんなの時間」に5歳クラス全員が遊戯室に集まり、L児がクラスみんなで『スーパースター』の踊りをする話を話した。担任は、L児に進行を委ねつつ、一人一人がどのような思いをもって参加しているのかを読み取り、適宜その思いを全体で共有していけるように話し合いに参加していこうと考えていた。O児が、「やっぱり、僕はやらない」とつぶやいたのが聞こえたため、その背景にはどんな思いがあるのかを質問した。すると、「難しくてできないかもしれないから」と話した。O児の「やりたくない」という思いも大切にしたい一方で、L児の「みんなでやりたい」という思いも大切にしたい。そこで、L児が「みんなでやりたい」と言った背景にある思いも聞けるように質問し、L児とO児が互いの思いを深く知れるように支えようと考えた。

「大丈夫、私が教えるからさ」「次に小学校に行くときに、小学生と一緒に踊りたいの」とL児が自分の思いを話したとき、担任は、ずっとO児の表情に注目していた。L児やM児に勇気づけられたり、L児の背景にある思いを聞いたりすることで、O児の表情が少しずつにこやかになっていくところを読み取れた。O児のやってみようとする気持ちが生まれてきているのではないかと捉えた。しかしながら、O児には、何となく周りの雰囲気流されて決断をしてほしくないという思いがあったため、「本当にそれでいいの？」と追って質問した。「うん、やってみる」と言ったときのO児には、迷いがなかったように読み取れた。

この日の副担任との振り返りでは、L児は『スーパースター』の遊びに夢中になることで、他の様々な育ちの姿につながっているのではないかと話し合った。具体的には、みんなでやりたいという思いを自分で実現していく姿、O児のやりたくないという思いを受けて自分が教えると優しく伝える姿、やらないと言ったO児を「すごいと思う」と伝える姿である。担任と副担任は、あこがれの気持ちを原動力に、こんなにもL児の育ちの姿が見られたことを、喜び合った。

また、L児が、『スーパースター』の踊りの遊びを、次回の交流にもつなげていこうとする姿から、1年生へのあこがれの気持ちは、遊びに大きく影響するのだと改めて共有した。担任は、1年生の担任といわゆる

「顔の見える関係」をつくりながら、子どもの姿をともに語り合い、交流がどうあるべきかを考えていくことが必要であると思いを新たにした。この日の副担任との振り返りを受け、担任は、1年生の担任にもL児の姿を伝え、遊びが育ちにつながっていることを伝えた。このような情報共有が、今後の遊びや交流につながってほしいという願いをもったからである。

L児は、この翌日も『スーパースター』の踊りの遊びを続けていた。ちょうどこの頃、5歳クラスの他の子どもたちから、「冬のお祭りをしたい」という声があがっていた。L児は、「私はお祭りで『スーパースター』のショーをしたい」と自分の思いを話した。そこで、L児との会話の中で必要な道具を聞き、タオルやCDデッキ、ステージに使うマットなどを、いつでも使えるように準備しておいた。

12月16日 あそびの時間

L児：「そら（3歳クラス）さん、ここに座ってね」
M児：「もうすぐ始まりますよー」
L児：「これから、『スーパースター』のショーが始まります」
4歳クラスb児：「私もやりたいなあ」
L児：「bちゃんもやりたいんだね。じゃあさ、ステージは
私たちがいるから、こっちの横の方でやってくれる？」
4歳クラスb児「うん、分かった」
3歳クラスc児「わたしもやる」
L児：「一緒にやろう。ここに来てね」
M児：「じゃあ、音楽流すね」
L児：「ちょっと待って、アナウンスが必要だよ」
L児、M児、N児がアナウンスのセリフを相談する。
L児：「せーの」
L児M児N児：「私たちが、小学校で教えてもらったダンスです。見てください」
ダンスを踊る。
担任：「Lちゃん、どうだった？」
L児：「楽しかった。小学校でも早くやりたいな。先生、次小学校に行くのはいつ？」
担任：「次は2月かな」
L児：「早く行きたいなあ」

5歳クラス全員での話合いを経て、この日に遊戯室で冬のお祭りを開催することになった。L児は遊戯室の後方に、マットを使ってステージをつくり、M児、N児とともに、『スーパースター』のショーの準備を進めていた。教師は、L児が目をは輝かせながら準備をしている姿を見て、何かL児に困った時があったときにすぐに支えられるよう、L児の視界に入ると思われる位置で見守ることにした。

L児たちの楽しい雰囲気を感じた3歳クラス、4歳クラスの子たちが遊戯室の後方に集まってきた。4歳クラスb児、3歳クラスc児が自分たちもやりたいという思いを話したとき、L児はステージの横で踊れるように優しく教える姿が見られた。担任は、遊びに参加していた4歳クラスb児、3歳クラスc児の姿を、L児の姿に重ね合わせながら、見守っていた。4歳クラスb児、3歳クラスc児が、L児にあこがれの思いをもっているのではないかと読み取ったからである。L児は、ショーに必要なアナウンスを自分たちで考え、自分たちでショーをつくり上げていった。担任は、L児がどのような思いをもってショーをしていたのか、達成感をもったのかをさらに読み取りたいと願い、踊りの後にL児に「どうだった？」と聞いてみることにした。L児は、早く小学校でもやりたいという思いを話し、2月の1年生との交流に向けての期待が高まっているように読み取れた。

副担任との振り返りでは、1年生との交流のあり方について話題になった。L児の遊びがあったからこそ、1年生の担任と、普段の遊びの様子について伝え合うことにもつながったのではないかと、そして、このような連携によって、今ある交流のカリキュラムを目の前の子どもたちの姿で、よりよくつくりかえていくことが大切なのではないかと話し合った。

その後、L児は、お楽しみ発表会でもこの『スーパースター』の踊りを踊りたいという思いをもった。1年生へのあこがれの思いが原動力となっているからこそ、L児の遊びはさらに続き、やってみようとする思いにつながっているのではないかと捉えている。

考察

Ｌ児は、１年生との交流を通してあこがれの思いを抱き、『スーパースター』の踊りの遊びに夢中になった。この遊びに夢中になる中で、さらにやってみようとする姿、友達や年下の子の思いを大切にしようとする姿、自然と友達とかかわろうとする姿につながっていると捉えた。遊びに夢中になることが多様な育ちにつながることは、今年度の研究の中でも、何度も話題になってきた。遊びに夢中になる原動力の一つは、やはりあこがれの思いであると改めて考えた。５歳クラスの子たちは、幼稚園の最年長クラスである。そのため、３・４歳クラスの子たちとは違い、普段の園での遊びの中で、年上の子の姿をほとんど目にすることがない。そのように考えると、やはりこの交流の機会は、あこがれの思いをもつとてもよい機会であったと捉えている。教師は、一人一人の思いを確かに読み取り、何に、どのようにあこがれの思いをもっているかを捉えていくことが大切である。

Ｌ児の姿を通して、交流のあり方への問い直しにもつながった。１年生との交流は、シナリオを決めて行うような交流会というよりは、互いの普段の活動や遊びの中に一緒に溶け込むようなかたちがよいのではないかと思った。互いに夢中になっている姿を目の当たりにすることによって、心が動き、あこがれの思いが生まれてくるのではないかと考えるからである。そのような１年生との交流をつくっていく時の教師の役割は、例年通りの活動を問い直し、既存のカリキュラムをよりよくつくりかえていくこと、そして、交流における子どもたちの心の動きを確かに捉えていくことであると考ええる。

＜5歳クラス Ⅻ期 2月＞ 話し合いを核として、 自分たちのくらしを自分たちでつくる姿を支える

これまでの保育の様子

3学期に入り、5歳クラスの子どもたちは、どの子も自分のやりたい遊びを見つけ、夢中になっている姿が見られるようになった。こまを回せるようになりたい、一輪車に乗れるようになりたいなど、目標に向かって一人で夢中になっている子、友達を誘ってゲームセンターをつくる子、緩衝材を使って自分たちでつくったボールを使ってサッカーやドッジボールを楽しむ子など、思い思いに遊びを楽しんでいた。製作をし終えた時、一輪車に乗れるようになった時などは、友達同士で「すごいね」と認め合う姿が見られた。担任は、遊びを見守る姿勢を基本としながら、遊びの拠点をつくる時の相談に乗ったり、子どもたちが必要な材料をタイミングよく準備したりして、一緒に遊びの環境を整えていくことで遊びを支えてきた。

日々の副担任との振り返りの中で、就学を目前にしたこの時期は「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」を特に大切にしていこうと共有した（ここでいう「くらし」とは、本園の教育課程の「あそび」「せいかつ」「みんな」の時間の全てを含む言葉として使用する）。「くらし」を「つくる」とは、遊びの発表会までに何回くらいリハーサルが必要なのか、大袋のおやつをどうやって分けたいかなど、自分たちに必要なことを、話し合いながら決め、自分たちで実践していく姿のことである。ただし、教師は全てを子どもに委ねるというわけではなく、子どもたちと一緒にくらしをつくる一つの主体になっていくことも大切にしてきた。大豆生田（2023）の言葉を借りると、「子どもが中心の共主体」である。

これまでに、「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」は大切にしてきた。そのため、子どもたちは、互いの思いを聞き合うことや、自分たちのことは自分たちで決めていくことのよさを実感しつつあるのではないかと捉えていた。そこで、就学後の姿を思い浮かべながら、帰りの集まりや、「あそび」や「みんな」の時間の中で自然発生的に起こる話し合いの場を、これまで以上に大切にしていこうと、保育の方向性を副担任と共に確認した。

2月17日 帰りの集まり

P児：「先生、大事な話があるので、前で話してもいいですか？」
担任：「うん、分かったよ」
P児：「Qちゃんと、Rちゃんも一緒に来て。あのさ、これが落ちていたんだけど、誰のかわかってる？」
S児：「それは、僕のじゃないな。だって僕は、こっちにあるから」
T児：「私も違う」
P児：「じゃあ誰のだろう。みんなさ、自分のものかそうじゃないかだけじゃなくてさ、他の人がつくって
いたのも思い出してみて」
U児：「え、どういうこと？」
担任：「これを、お友達が使っていたのをみた人はいる？もし、みた人は、『誰々が使っていたよ』って教
えてほしいっていうこと？」
P児：「そう、そういうこと。誰かわかってる？」
V児：「お休みの人じゃないの？」
Q児：「今日はWちゃんがお休みだから、Wちゃんのかもしれない」
R児：「私もそう思う」
担任：「Wちゃんのかもしれないね。ところで、Pちゃんさっき、『大事な話』って言ってたけど、どうし
て大事だと思ったの？いつもなら、『こーれだーれの一？』ってみんなに聞いていたと思うだけ
だよ」
P児：「だってさ、今みんな編み物やってるじゃん。これをなくしちゃったらさ、明日の遊びが楽しくなく
て、悲しい気持ちになっちゃうって思うから。だって、あと15日で幼稚園終わりでしょ？だから
時間もないし」
担任：「それで『大事な話』って言ったんだね。なるほどね」
P児：「でも、Wちゃんのだって、分かってよかった。ロッカーの上に置いておいてあげよう」
R児：「私が置いておくね」

帰りの集まりの時間は基本的に、読み聞かせ、その日の当番の子のインタビュー、担任からの話、帰りのあいさつで構成されている。3学期になってからは、P児のようにクラス全体に伝えたいことがある子が前に出て話をしたいと担任に申し出る姿が増えてきた。P児は「大事な話」があると言ったため、P児の話を聞く時間を設定した。P児の話を聞く中で、P児が伝えたい内容は、落とし物があつたから持ち主に届けたいということであると担任は読み取った。これまでであれば、片付けの時間に「こーれだーれの一？」と大きな声で聞いていたので、なぜP児は帰りの集まりで、みんなの前で言うことにしたのかが聞きたくなり、担任はどうして大事だと思ったのかを問い返すことにした。P児の話から、幼稚園でのくらしが残りわずかである

ことを根拠に、今夢中になっている遊びができなくなったら友達が悲しいからという思いで「大事な話」と言ったのではないかと読み取れた。

副担任との振り返りでは、帰りの集まりでのP児の姿が話題になった。P児自身が大切だと思ったことをみんなの前で話したいと言ったこと、修了を目前に控えた時期だからこそ互いの遊びを大切にしていたことは、担任や副担任が思い描いていた「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」なのではないかと話し合った。また、話合いを支える担任は、どうして大切だと思ったのか、その背景にある思いがみんなに共有できるようにすることが大切であることも確認した。P児が落とし物があると伝えたとき、担任が「落とし物ボックスに入れておくね」などと言で済ませることもできた。しかし、P児のように自分たちのことは自分たちで解決していこうとすることが大切であり、それが「自分たちのくらしを自分たちでつくる」ことなのではないかと改めて考えた。

翌日、W児が登園し、P児が編み物を届けてくれたことを知った。担任は、W児に前日の話合いの内容を伝えた。するとW児は、編み物ができたらP児にもあげたいと話し、編み物の遊びにさらに夢中になる姿が見られた。話合いをすることで、「あそび」の時間の充実につながっていくことがある。そのため、話し合っ共有されたことが、その後どのような育ちにつながっているかも、長期的な視点で捉えていこうと副担任と確認した。

2月20日 帰りの集まり

X児：「先生、私今日みんなに話したいことある」

担任：「うん、いいよ。でも時計の12まであとちょっとしかないけど、それでもいい？」X児がうなずく

X児：「あのさ、今日『逃走中』した時にさ、Yくんが『早歩きでしょう』って言った時、みんなが『えーやだー』って言ったでしょ？でもさ、やってみたら結構楽しかったでしょ？あの時Yくん悲しかったと思うから、『えーやだー』って言うの、もうやめてほしい」

担任：「みんな、Xちゃんが言いたいことは伝わった？」

V児：「うん、分かったよ。Yくんが悲しかったから、『えーやだー』って言うのやめてほしいってことでしょ？」

X児：「そう、Yくん悲しかったと思うよ」

担任：「Yくんは、その時どう思っていたの？」

Y児：「僕は、Zちゃんがけがしちゃったから、みんながけがをしないように、早歩きって言ったのに、やだって言われたから悲しかった」

S児：「でもさ、『逃走中』は、走らないとおもしろくないんだよねあ」

A児：「僕もそう思う」

S児：「早歩きはいやだなあ」

X児：「私が言いたいのはさ、やる前から『えーやだー』って言わないで、まずはやってみることが大切だと思うの」

担任：「なるほどね、おもしろいかどうかは、やってみないと分からないってことか」

X児：「そうなの」

担任：「みんなはどうしたい？」

P児：「私もXちゃんと同じ。まずやってみるのがいいと思う」

この日X児は、みんなに話したいことがあると、担任に話した。帰りの集まりを終える数分前であったため、翌日にしようか迷ったが、X児が自らみんなの前で話したいと言ったことは初めてのことで、時間の許す限り話合いをしようと考えていた。X児は、この日のみんなの時間のことを振り返り、『えーやだー』と、友達の提案を否定することについて話題にした。担任はこの時、全員にX児の話した背景にある思いや意図が伝わってほしいという思いをもち、「みんな、Xちゃんが言いたいことは伝わった？」とクラス全体に問うたり、「Yくんは、その時どう思っていたの？」と当事者の思いを知ることができるようにしたりして支えることにした。X児は、「まずはやってみることが大切」と話した。

副担任との振り返りでは、「まずはやってみることが大切」ということは、担任が子どもたちに願ってきたことの一つであり、これまでのくらしの中で、X児にもその願いが伝わっていたのではないかとこのことを共有した。どこで、どう伝わったのかは分からなかったが、X児は、まずやってみることが大切であるということをもっと遊びの中で何度も経験していたのではないかと話し合った。この日のX児の姿は、自分がよいと思ったことを本音で話し、自分たちのくらしをよりよくしていきたいという姿であると捉え、これも「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」とであると共有した。

一週間後、遊びの時間にS児、Y児を含む六人の子が『逃走中』をしていた。その際にY児が「おにを一人増やして、二人にしてやってみよう」と提案した。賛同する子もいたが、「それだとすぐ捕まっちゃうから楽しくない」と、二人でおにをすることに反対の子もいて、賛否両論であった。その時にS児が「この前Xちゃんが言っていたみたいに、一回やってみる？」と話した。2月20日の話合いの時は、ルールを変えないです

ることを主張していたS児がそのように話したことに担任も副担任も驚いた。遊びの中でルールを変えて試してみようと思った姿に育ちを感じたからである。やはり、帰りの集まりでの話合いが、「あそび」の充実にもつながっていくのだと改めて感じた。

考察

クラスで落とし物があったとき、時間効率を考えれば、教師が「落とし物ボックスに入れておくね」など一言で済ませることができる。しかし、その時は時間がかかるかもしれないが、P児の言葉の背景にある思いをクラスで共有していくことで、自分たちのことは自分たちで解決していこうとする姿につながっていく。教師は、遊びの中で言い合いになった時、「いやだと言わずに、まずやってみよう」と子どもに伝えることもできる。しかし、子どもと教師と一緒に考え、まずはやってみるということの価値や意味をつくったり、確認したりしていくことが大切であると実感した。

「自分たちのくらしを自分たちでつくっていく姿」は、話合い、思いの背景を知り合うことが欠かせないのではないかと考えた。そして、話し合った結果何が決まったかということよりも、自分たちで遊びや活動、生活をつくっていく話合いのプロセスにこそ大きな学びがあるのではないか。「子どもの有能性を信じる」という言葉を耳にすることがあるが、今回の事例の子どもたちの姿から、この言葉の意味がさらに実感の伴う言葉になったように思う。また、教師は、何かを教えるというスタンスだけではなく、子どもたちとくらしを共にする仲間の一人としてクラスの中に在り、一緒にくらしをつくっていくようなスタンスももち併せていることが大切であると思いを新たにしたい。

参考文献

大豆生田啓友（2023）「子どもが中心の「共主体」の保育へ～日本の保育アップデート！～」 小学館